
快適なネクロマンサー生活

8in13

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

快適なネクロマンサー生活

【Nコード】

N1818R

【作者名】

8in13

【あらすじ】

テンプレで神様と会ってネクロマンサーになって最終的には魔王になってもらう予定のおはなし

この作品はオリキャラ・設定が多数使われており、人が死ぬのが軽く書かれてる所があるので、そういう作品が嫌いな人は見ないでください。

再構成思案中

ブローグ - 死ぬまでの経緯 -

もが

今日はクリスマスイブ、どこに行ってもバカップルリア充ど

ギシギシアンギシギシアンギシギシアン

そしてあるネットゲ準廃人のドクオは賭けにでる

一酸化炭素の濃度が致死量が部屋に充滿する前に
見知らぬ愛らしい女の子が「お兄ちゃん」って

玄関からお邪魔してくることに

綺麗な鏡が突然目の前に現れて

ツンデレピンク召喚されることに

紫のBBAではなく少女に幻想郷に招待されることに

生死を賭したのだ

「まだ練炭買ってきてなかった」
糞長い前置きを書かせといて何しとんねん

「いやあ悪い悪い」

あ、ここ外ですよ。あなたひとりごと言ってる基地外に見えます

「鬱だ死のう」

それつきり黙って練炭を買いに行くドクオ29歳童貞

「ドドド童貞ちやうわ」ボソ

周りからの怪訝な表情に気づき顔を赤くする

そして帰り道

（ああ、やっぱり魔法使いになってから死ぬべきか？遺書に童貞をこじらせて死にそう、俺はもうダメだぐらいは書いて）

そんなことを考えてると

「ブブーキキーブブー」

トラックが走ってる前に幼女がいるのを見た

ここでドクオは天才的な発想がよぎる！

（ここがかっこ良く幼女救出 俺かっこいい！ 誰か惚れる 童貞

卒業ヒヤッホーイ…キタコレ）

すぐに幼女に突っ込む

「とぉーううおっと」

走ってる途中につまずいたせいで、タツクル気味で幼女を突き飛ばしてしまふ。そして自身はというところ…

（ヤベエヤベエヤベエヤベエヤベエ…）

走馬灯を見ていた。なぜなら彼は転んでしまい、まさにトラックの

車線上だったのだ。

「生涯童貞で生きてやるー！」

やけグソ気味に変なことを口走り、彼はグシヤ

設定やらなんやら（随時更新かな）（前書き）

とりあえず技全部書いていってるけど使うかしらない

いい運用方法募集

本家と微妙に変わってるところあり

これらの技を見て、状況によりもっとふさわしい使い場所があるかもしれないですが作者の程度がたかが知れてるのでご了承ください
技の説明は下

設定やらなんやら（随時更新かな）

独自設定

不死族が存在する。彼らは太陽を嫌い、暗闇を好む。一般的には死体を食らい、血を啜る存在

新月のような月が出てない時は不死族の力が満ち、最も不死族らしい行動をする時期

腐敗、汚染された土地だとかかなり不死族の能力が発揮される

長い時間不死族の定めを耐え続けた者はこの限りではない

太陽自体が嫌いなわけではない

明るいと討伐されるといふ本能？のような物があるから明かりを嫌う知性のある者はこの限りではない

吸血鬼などの強力な不死族は懸賞金をかけられる。知性を持つ方が懸賞金が高い傾向にあり

主人公

容姿：目の瞳孔がかなり開いている、長い銀髪、ポーカーフェイス
性別：オス

保持スキル：真祖の吸血鬼、オーラ、特殊なネクロマンシー

魔力：なし

気：なし（訓練次第で出せそう）

吸血衝動はまだ抑えられないらしい。特に新月のような不死の者の力がみちる時。気さくな性格

初対面でもタメ口を使ったため馴れ馴れしい等と言われ嫌われること
もしばしば

自分の身を自分でちゃんと守れる者としか友だちになるうとしない
三大欲望から逃れてるはずなのに食べるのが好き。
おそらくダンジョンでポーションしか飲んでなかったから

カーネギー・サンダー

容姿：狼の獣人。前から見ると人間になってるが、後ろから見ると
髪の毛の方から背中まで全部灰色の毛で覆われている

性別：オス

保持スキル：驚異の回復力

魔力：少なめ

気：気と思われる物はかなり大きめ

六部族の”雷”に所属している近距離戦が得意な獣人、弓に”魔法
の弓矢”をつがえて撃ってくる。

キユー

容姿：あなたの想像する20代後半のイケメンの髪の毛を赤に変え
れば完成。万年ニコニコ

性別：オス

保持スキル：真祖の吸血鬼、魔力制御、超直感

魔力：チート

気：まあまあ（魔力と比べた場合）

お父さんっ子（むしろ依存）、魔法の射手を無詠唱で1000本単
位で容赦なく撃ってくる鬼畜、でも

お父さんの命令は絶対

オリジナル魔法

魔法の矢

六部族の使っている弓で使うために射手を改良した物。文字通り矢
なのでセンスがない人は射手の方が強いが、ハマれば数倍の威力

風よ・闇よ・雷よ、氷よ・火よ・砂たちよ　すべてが矢となり敵を撃て　魔法の射手　混合6万矢
砂だけ”たち”になつてるのは散開するから複数かなという考えから。

同時に複数属性の射手を撃つ魔法、”混合”という言葉があるのは合計6万になればいいから割合はその時の精霊たちによります。
”来たれ○○の精”的なことを普通言いますが省かれています。簡単にいえばめちやくちや偉そうな奴が相場より高く払う感じです。プライドか相場よりはるか上の魔力（賄賂）か

オーラ一覧

スケルトン・マスター

常時発動オーラ（オーラポイント不使用）、使役している骸骨スケルトンの攻撃力及び体力上昇
熟練度により攻撃力及び体力上昇量増加（スケルトンを使つてれば勝手に上がる）

ゴーレム・マスター

常時発動オーラ（オーラポイント不使用）、作り出したゴーレムの体力及び移動速度を上げる
熟練度により体力及び移動速度の上昇量増加（ゴーレムを使つてれば勝手に上がる）

サモン・レジスト

常時発動オーラ（オーラポイント不使用）、すべての召喚物にすべ

ての魔法耐性を与える。

熟練度により耐性増加（最大半減）

ある領域に行くと魔力吸収が付く（消化しきれないほど打ち込まれるとしばらく不能）

魔力により回復及び魔法攻撃のダメージ増加可能

献身のオーラ

およそ2〜3割のダメージ軽減

才気のオーラ

魔力回復速度上昇

耐久のオーラ

3割の移動速度および2割攻撃速度上昇

茨のオーラ

近接ダメージの3割分茨のような痛みとダメージを返す

精密射撃のオーラ

射撃系の攻撃をする時、遠距離攻撃の技術が3割増

不浄のオーラ

3割程度移動速度上昇および回復力上昇

吸血鬼のオーラ

近接攻撃で相手に与えたダメージの5割分回復（外傷がなくなった場合内側を治す）

術一覧（手加減にも熟練度があります）

アンプリファイ・ダメージ

掛けた相手の防御力を下げる（物理耐性）
熟練度により効果時間及び下げる量増加

ディム・ビジョン

バカ（獣など）の視界を真っ暗にする
熟練度により効果時間増加（極めれば一般人にも効く）

テラー

バカ（獣など）にもつとも恐ろしい物の幻覚を見せる
熟練度により効果時間増加（極めれば一般人にも効く）

アイアン・メイデン

近接攻撃で与えられたダメージを相手に倍返しする技
熟練度により効果時間上昇

ライフ・タップ

与えた敵に近接攻撃すると与えたダメージによって体力を回復
熟練度により効果時間および回復量上昇
（最大で与えたダメージの5割回復）（外傷がない場合内側を治す）

コンフューズ

バカ（獣など）に周りのすべてが敵に見え、殺さなければ殺される
という強迫概念を与える

熟練度により効果時間増加（極めれば一般人にも効く）

アトラクト

対象の周りのすべての者が対象に攻撃を与える

熟練度により効果時間増加

デイクレピファイ

一時的に老化させ、行動速度・攻撃力・防御力を落とす

熟練度により効果時間および減少量上昇（最大で肉体寿命限界寸前、不老系には効かない）

ロウアー・レジスト

掛けた相手の防御力を下げる（魔法耐性）

熟練度により効果時間上昇

ポイズン・ダガー

装備中のダガー系の武器に毒が付き、切れ味が上がる

熟練度により毒の強さ、切れ味が上昇（極めれば次の段階、アンチマジックが付く）

ボーン・アーマー

自身の周囲を旋回する骨の盾を作る

熟練度により耐久力上昇（極めればマジックも防げる）

コープス・エクスプロージョン

落ちてる新鮮な死体を爆発させる
熟練度により威力上昇

ポーン・スピア

直線状に骨の槍を射出する、貫通系
熟練度により太さおよび貫通力上昇

ポイズン・ノヴァ

自分を中心に円状に毒のフィールドを展開する、自分には効果がない
熟練度により距離および威力上昇

ポーン・スピリット

亡霊による”気”の誘導弾を撃つスキル
熟練度により威力上昇（基本的にはそこら辺にいる一匹を捕まえて
使用）

レイズ・スケルトン

死体を媒体に骸骨を召喚し、使役する。基本自分で敵を探し、攻撃
をする。マスターの命令優先
熟練度により同時に召喚および使役できる数上昇

レイズ・スケルトン・メイジ

死体を媒体に魔法を使える骸骨を召喚し、使役する。炎・冷気・稲
妻・毒の4属性存在する

熟練度により同時召喚および使役できる増加

レイズ・スケルトン・キング

ナイトメアを開放させた際に完成させた新しい魔法。王族の死体を媒体に骸骨を召喚し、使役する。レイズ・スケルトンが使い、一般のスケルトンの十倍の強さを持つ。

熟練度により狡賢くなる

リバイブ

3分間倒した敵を蘇生し従わせるスキル。あまりにも強力な魂を持った対象は使役できない。

熟練度により同時蘇生および使役数上昇

クレイ・ゴーレム

土のゴーレムを召還する。特に能力はないが瞬時に作れる。

熟練度により上昇するものはなし

ブラッド・ゴーレム

血と肉でできたゴーレム。自分の血少数と死体を主に作る。作り主と繋がっており、

ダメージを与えると作り主は回復し、ダメージを受けると作り主もダメージを受ける

熟練度により回復量増加

アイアン・ゴーレム

金属のアイテムを地面に投げ、それを媒体に鉄のゴーレムを作りだ

す。その際、使った金属に
なんかしらの特性があった場合、その特性を持つ。金属の質により
効果時間上昇

熟練度により相手の攻撃を返す力を持つ（最高倍返し）

ファイア・ゴーレム

炎のゴーレムを召還する。炎のダメージを体力に還元する。近づいたものにダメージを与える

熟練度により炎のダメージの還元量を増加（最大100%）および
周りに与えるダメージの範囲を増加

設定やらなんやら（随時更新かな）（後書き）

更新や修正するところあったらどんどん修正します

第一話（前書き）

Diabloのネタバレ成分含みます

第一話

「知らない天井だ。」

とりあえず言ってみただけこれ天井あるのか？

あたりはどこを見ても真っ白。何も見えないし奥行きすらわからない。そんな中、気づくと背景に溶け込むのと逆の感じ、溶け出すとでもいいのだろうか、だんだん色がついてきて、最後に見た幼女が現れた。

(どういう事なの…)

完全に出てくると幼女がいきなり土下座し始める

「え、ちょ」

「本当にすみませんでしたあああああ」

こ、これは…

「あなたが見知らぬ幼女が訪ねてくるか死ぬかの賭けをすると聞いてまだ死ぬ運命じゃないから

賭け勝たせてまだ生きてもらおうあげようと思ってあなたの家に行こうとしたんですが逆に死亡させてしまいました」

息継ぎもせず一気にまくし上げる幼女。

これはもしかしてチート転生フラグか？

「なので今から時間戻して復活させますんで勘弁して下さい！」

「え」

「どうしたんですか？普通の人なら復活させてくれるって言ったら喜びますよ？」

「」

そこは能力与えて転生ダロ・・・

「あ、もしかして転生が御要望でしたか。それなら早く言って下さいよH A H A H A」

「チート出るの？」

「…わかりました。チートは何かいいですか？神殺しとかそう言うのじゃなければ融通しますよ」

「じゃあDiablo2のネクロマンサーの術を魔力消費で無制限に使える、Warcraft3のヒーローのレベルマックスのオーラ全種類、Warcraft3とDiablo2に出てくるすべての消費タイプのポジションとスクロールを無限に取り出せる”壊れない”が負荷されたポーチを一つ、Diabloシリーズで出てくる敵が入っていて倒しても入るたびに復活する別荘と空の別荘…あ、別荘つてのはエヴァンジェリンの持つてる奴ね？それぞれ”壊れない”を付加で一つづつ、20代の真祖の吸血鬼に憑依でスタートする。指定世界は”ネギま”」

「」

「どうしたの？」

「ちょよ、ちょよと強すぎないですか？」

「この程度でチートとか…もっとエグイのにする？」

「いやいやいや、それはもっと勘弁して欲しいんですが…」
難色を示したのを見て

「じゃあ全部原型留める程度で弱体化していいよ」
譲歩することにした

「本当ですか！ありがとうございます」

「え、そんな感謝されることしてないんだけど…」

生き返らせてもらえるのに断ってわがままを言ってるという罪悪感を少なからず持っていたドクオ（仮）「俺には岡山純平って名前があるわ！」「どうしたんですか？」「い、いえ…気にしないでください…ただの発作です…」岡山純平は思わずたじろぎ、自滅する

「うーん」

しばらく考え込む少女

「いつ言つのはどうですか？」

紙を出して渡してきた

・ネクロマンサーの術は代償なしで使える、ただし術に必要な物がある場合、それがなければ使えない。威力、質、数などはすべて熟練度によって変化する

（うん、熟練度を抜けば強化かもしれん）

・1日1オーラポイント上限を上げる。オーラ1秒につき1オーラ

ポイントを消費。2秒で1オーラポイント自然回復する

(別荘使えば結構行けるから許容範囲内だな)

・消費アイテムは一度使うと補充までしばらく時間がかかる。強力なほど、補充までに時間がかかる。ポーションの場合、飲み終えたあと入れ物を戻すと補充し始める

(まあ攻撃できなくなる無敵ポーションとか一瞬で超回復するヒーリングポーションとか透明になれるポーションとかチート臭いのいっぱいあるからな、補充されるだけましだろう、

・Diabloの敵が出る別荘は地下ダンジョンという形を取る。体に乗っ取られる系は起きない

(忘れてた…魔王倒すと魔王になるんだっ…)

・吸血鬼の記憶を持たず、魔力も気も一切持たない状態で憑依、しかしこれまでの記憶は覚えている

魔力も気も一切持たない状態で憑依

魔力も気も一切持たない状態で憑依

魔力も気も一切持たない状態で憑依

(なん…だと…)

「あ、その点についてはネクロマンシーをなにも代償を払わずに使えるのでそれ以外にも魔法使えたらチート過ぎると思ひまして…」

「ぐぬぬ…」

「じゃあ…呪いが効かない体にしましょうか？」

「む」

「今ならディスプレイ系の魔法であなたのネクロマンシーやオーラが消える事がなくなりますよ！」

「わかった！それで頼む！魔力も気もいらないよ！…でもネクロマンシーとオーラについての記憶は絶対に忘れない状態にしてよね」

「現金ですね。ハハハ」

思わず苦笑いしてしまう少女

「あ、いい忘れてた。俺以外にも転生者とか憑依とかする人いる？」

「いないですが…あなた以外にも入れます？」

「いや、いれないください」

「わかりました、何年前ぐらいに送りましょうか」

「じゃあ原作開始の1000年前からで」

「わかりました。では」

チユ

少女は脈絡もなくキスをしてきた

そしてカードが出てきた

「契約させてもらいました。ではよい旅を」

俺の目の前は真っ暗になった

第一話（後書き）

ネギま見ながら適当にやっときます

第二話

「忘れてた…魔力がないと障壁を出せない…」
いきなりやらかす岡山純平であった。

「うるせい！とりあえずネクロマンサーはいれるだろ？あと名前どうしよう」
とりあえず特徴上げてみるよ

「アンデッド、ネクロマンサー、ノーマナ」

「ノーマナ・ネクロアンデット」
うわ、センスねー

「ほっとけ。とりあえずカード確認…」

絵は琥珀らしき物がいっぱい付いたの杖を持った骨装備で固めた長い銀髪の男。

「うわ、瞳孔超ひらいてんじゃん、こわ。ていうか俺がこれ」

主人：？？？

名称：ノーマナ・ネクロアンデット

称号：ネクロマンサー

徳性：信仰

色調：紫

方位：中央

星辰性：黒い穴

（ううむ、意味がわからん。主人の名前もないし…でもノーマナ・ネクロアンデットで固定されたな。名前付ければ名前が出るんかな。
じゃあ）

「知られざる最上神で決定！」

主人：知られざる最上神

名称：ノマナ・ネクロアンデット

称号：ネクロマンサー

徳性：信仰

色調：紫

方位：中央

星辰性：黒い穴

「おお、予想あたった。どうせならもつと他の名前にしとくべきだったかな。まあいいや。神様だしアーティファクト位出るだろ」

「アデアット！」

叫ぶ必要はないけどそこは気分を盛り上げるためと言いはっておく出てきたのは穴ぼこだらけの杖

「なんだこれ」

（あーあー聞こえていますか？）

「うわ！杖が喋った？」

（違います！知られざる最上神です！というかこの名前どうにかならないんですか？）

「うるせー、ネーミングセンスなくて悪かったな」

（…とりあえずこれは契約カードによる念話です。杖の穴ぼこはソケットですがわかりますよね？）

「おう、ディアブロユーザーなめんな」

（個人的にはソケットには世界樹の樹脂でできた琥珀がおすすめで
す。いつかあなたが世界樹に接触する時に樹脂を貰えるよう頼んで
ください。なおこの記憶は忘れても世界樹を見たぐらいに思い出し
ます）

「それはありがたい。で、なんで世界樹の琥珀？」

（念話できるのでしゃべらなくてもいいですよ？世界樹の琥珀な
ら魔力がなくても代わりに世界樹の魔力が使えます。しかもソケッ
ト20個あるので20個分いければ最強に障壁が強いですよ）

（な、なんだってーえーえー略）

（うわこの人自分でAA略なんて言いましたよ恥ずかしい）

（うっせーバーカヴァーカ…ばーか）

（ああ、ごめんなさい、言い過ぎましたか）

（大丈夫だよ。でも教えてくれてありがとう、あと契約も）

（どういたしまして。他にもわからないことがあるなら説明します
が）

（必要なときに聞くよ。多分大丈夫だと思うけど）

（わかりました。ではまたの機会に）

(またねー)

よし、とりあえず状況把握しよう

ここは崖、下は川、後ろは森

うん、一択だな

森行つて骨生産してこよう

骨軍団伝説はこれから始まる…はず

第三話

森の中に入るとついテンションが上がって

走る

走る

走る

疲れる

走る

走る

走る

虎にあつて怖くて逃げ出そうにも疲れて逃げられない

「う、うわああああああああ」

ザシュ

いきなり虎の頭に矢が生えた

思わず首を傾げる、他の人が見たらきつと？マークが出てるように見えるだろう

「わーあああわーははひゃひゃひゃ」

だけど気づく、これチャンスじゃね？と思って悲鳴から雄叫びに切り替えて杖でひたすら殴る

え？雄叫びじゃなくて奇声？気のせい気のせい

ガサガサ

思わず音がした方を見ると獣人がいた、なんかのけぞってる

「え」

逃げられた…

「まあいいけど…これで死体ゲットかな。あれ、俺クレイゴーレムできたよね」

クレイゴーレムという言葉に反応したのか地面がモコモコって盛り上がって

人の大きさのゴーレムになる

「うん、どーうせ頭の骨折れてたらしょっぱいスケルトンになりかねないしボーン・アーマーにでもしちゃおうかね」

やっぱり独り言に反応して、骨の盾に形成されていく

「代償なしってのがいいね、まあレイズスケルトン以外に代償使う場所あまり考えてないけど…」

すると、虎の体（肉）がボロボロと落ち、きれいに骨だけが立つ。頭に穴が空いていた

骨を観察してたら血の匂いに釣られた野獣…ではなく魔獣がやってくる

「ゲエ、いくら吸血鬼でも食われたらキツいつつの」

クレイゴーレムに虎の血を浴びるようにさせて、自分はとっとと逃げる。虎スケルトン連れて

魔獣たちの大半は勘違いしてクレイゴーレムの方に向かうが、

やはり一部はこちらに向かってくる

「くそ！どうすればいい…」

この時再び天才的なヒラメキがよぎる！

（ダンジョン別荘に入る 強くなれる ついでに魔獣どももやり過ごせる やばくなったら透明ポーションで1日待つ キタコレ）

よし、これでいこう

俺はすぐさま暗い色の玉を足元に置く、すると足元に魔法陣浮き上がり、俺は中に入った

入る直前にボーン・アーマーが破壊されて自分にタツクルしてきた魔獣がいたけど

虎スケルトンが捨て身で助けてくれた。あとボーン・アーマーが微妙に防いでできたタイムラグで当たらなかった。あってよかったボーン・アーマーとスケルトン

ダンジョン入って気づいたけど…俺飯持ってきてねーぞ…

第四話（前書き）

ダンジョン別荘のおはなし

第四話

(ようこそ！Diabloの不思議なダンジョンへ！)

「うおい、ビビらせんな」

思わず声が出てしまうノマナ

(おっと失礼、思わずテンションが上がってしまいました)

(で、なんだよ不思議なダンジョンって、まさか風来のシレンみたいなシステムか)

(もう、言わせてくださいよ)

(えっマジで？どうしよう、クリアしないと出れない)

(落ち着いてください、そう言うの含めてシステムを解説しますから。というか契約カード見ればわかるんですけどね)

(それを早く言えよ)

(すみません)

謝らなくてもいいのに……と自分が言った事を棚にあげながらカードを読む

簡単にまとめると

・入ると持つてる杖以外は何も装備してない状態。(おにぎりとか食べ物にすればいいのに)

・ネクロマンシーしか使えない(オーラ使用不可)

・Diabloに存在するポーションと識別スクロールといろんな武器や防具のみ

・ゴールド・エリクサーは一つしか存在しない大事なイベント用アイテムらしい

・ゴールド・エリクサーイベントをクリアするとボーン・スピリット用の忠実な魂が手に入る

・ボーン・スピリットの魂を手に入れると最下階まで開放される

・食べ物はファイア・ゴーレムに渡すとできたての状態で返される

・食べ物の中には人肉が入ってる料理あり

・食べ物/materialは識別のスクロールでわかる

・死ぬと杖以外全部ダンジョンのどこかに散らばり、別荘から出される

・1日立たないと出れない。1日立たずに死んだ場合は永久にさまようハメになる

・一度出ると最初からやり直し。アイテムなどは死ななかった場合引き継ぎ可能

・1日が外の1時間

(人肉エ…)

(遊び心で取り入れてみたんですがどうですか)

(ふざけるなああああ)

King Crimson後の日記を御覧ください

1日目

スケルトン用一団殺したあと全部スケルトン任せ、楽でいいね。死体を片っ端からスケルトンに変えていく。1日の終わりにカードから1日立ちましたって音が出た。マジビビッた。死ねばいいのに。

2日目

やっとスケルトン2体出せるようになった。他の術も使おうということ。鉄の使われてるアイテムを拾ったら即アイアン・ゴーレムに変えていく。あとアイアン・メイデン最強すぎだろ

3日目

やっと食べ物拾った。これまでポーションで飢えをしのいでたからテンション上がってヒヤッホーイした。でも何を思ったが識別スクロールしたら(人)肉屋さんが下ろした肉を使ってた。

知らなければ食べたのに…

4日目

食べ物が3つも手に入った。識別スクロール余ってたから使うと2つはセーフだった。危なかった

これからは識別スクロールを食べ物用にとっておこう。ご飯が美味しい

5日目

スケルトン2体とメイジ・スケルトン1体出せる様になった。アイアン・ゴーレムまあまあ持つ様になった。そろそろ外に出よう。

第四話（後書き）

不思議なダンジョン編終了

熟練度の修行に最適だね！オーラポイントも貯まるよ！やったね！

第五話（前書き）

ノマナ・ネクロアンデットさんは別荘を玉と読たまよんでます

取り合えず言葉の部分は後ほど神様が言葉がわからないと困るだろうという事に気づき、こっそり言葉がわかるようにしました

第五話

「ポーション地獄から開放されて早速食べ物探しに行く俺：ん？」
玉から出て来てブツブツ何かを呟いてる怪しい人が約一名

その怪しい人一名に気づいた弓を持った獣人一人。

そしてその獣人は矢を矢をつがえた所で、気づかれる。

「うわ、ヤベエぞ、”クレイゴーレム”！」

撃たれた矢はそのまま土からできたゴーレムに刺さる。

「！」

少し目が開いたように見えた。そしてすぐに呪文を唱える

「ジリアンヌ・プラクティヌ・セリアンヌ 雷の精霊八柱 集い来
りて 敵を撃つ 雷の矢となれ 収束・雷の弓矢」

「あいつ馬鹿だろ何が八矢だよ多すぎなんだよクソが」アイアン・
メイデン”” アイアン・ゴーレム”” ロウアー・レジスト”” 献身
のオーラ” 発動」

アイアンメイデンとアイアンゴーレムの効果で攻撃した約2・3倍
のダメージで返される獣人。アイアンゴーレムはそのまま崩れる

「” 献身のオーラ” 停止、節約節約っと。やっぱりしょぼいダガーの
せいか耐久うんこだなー、毒ダガー用にとつといたんだけどしかた
ない。最初は他の獣人に助けられたし助けてやるかね。助かるかし
らんけど」

「” 不浄のオーラ” 発動」

数秒後

「やべ、オーラポイント切れた。しばらく休んで、”不浄のオーラ”発動」

King Crimson

獣人本来の回復能力も相まってかしばらく（具体的には2時間ぐらい）すると復活してきた。

うーむ、ダメージ的には十六柱＋なんだけど回復早すぎじゃね？あ、障壁か

「ぐ…どこだここは…確か私は吸血鬼に負け…！」

「お、おはよう。気づいたか？」

「貴様…！吸血鬼、何が望みだ！まさかっ」

はつとした顔で自分の首に手をやる獣人。最初は片手で、その後驚いたような顔で両手で

ノマナは最初は怪訝そうにしていたが、しばらくすると何かに気づいたようにニヤニヤしはじめる

「俺の血を…飲んでないのか？」

「え？飲んでほしいの？わるいね、今禁血してるから理性が吹き飛ばよくな止む終えない時以外は吸いたくないのよ。あと俺の名前はノマナ・ネクロアンデット、好きに呼んでくれ」

「そ、そうか…ああ、俺は六部族の”雷”に所属しているカーネギ

「サンダーだ」

「で、なんで襲ってきたんだ？」

「何を言っている！お前ら不死族は俺たちに害をなす存在だからに
…そうか、

俺を油断させて仲間を売らせようという魂胆だな！その手には乗ら
ないぞ！殺すなら殺せ！」

「何この人話し通じない。てかそれならなぜ名前教えたし」
後半はボソツと

「なんだと？」

「お前を助けたから代わりにお前らの集落で食べ物もらおうと思っ
てたけどいいや、
お前食べ物もってこい」

「お前が付いてきたらどうする」

「返り討ちにすればいいだろ」

「お前の方が俺より強いじゃないか」

「そうだったけ、じゃあどうすれば信じてくれるんだ？こう見えても
俺は不死族の中でも異端でね、しかも新参者。だから不死族の20
0匹や300匹、弱ければころしてやるぞ？」

「じゃあ俺の任務を手伝え、ある真祖の吸血鬼を見つけ、可能なら
ば殺す」

「え、それ俺？」

「なんだ、お前も吸血鬼だとは分かっていたがまさか真祖だったとはな。

まあ特徴は違うから違うだろ、確か赤い目に赤い髪、真っ白な肌だったらしい」

「ふーん。じゃあ一緒に行動しないか？」

「ああ、実際に信用できるか見てやる。すでに一度死んだ身だ、もう一度死んだって構わないだろ」

「いやいや、そこはむしろせっかく生き返ったんだからもつと大切に生きようとは思わんの？」

「当たり前だ！一人が部落のため、部落が一人のためだ。貴様こそおかしな事考える」

「そうか？まあいいけど。ちなみにお前の血を吸って従者化させれば部落に行くなんて造作も無いけどな、クク。」

「！！！」

「まあいいじゃん、行くところ」

第五話（後書き）

もう本編突入も介入もせず
に世界観だけ借りて書こうかしら

第六話

真祖の吸血鬼さがすと決めたのでこちらに帰ってきてるスケルトンメイジ×1とスケルトン×1に特徴が一致するやつを探させ、玉にしまったスケルトンを呼び出して探しに行かせる

「おいなんだそれは」

「これが原因で襲いかかってきたんじゃないか？だから俺が使役してんだよ」

「だからどこに行かせるというのだ。俺はスケルトンズにテレパシ―で指示を出せるんだよ、だからこうやって手分けして探させてるわけ」

「お前…」

「？」

「不死族と契約したのか…」

「え、ちょ、チゲーよバカ！これは俺の魔法！いいか？ま・ほ・う・だ！」

「だがお前真祖と名乗ってる割には魔力皆無だしこのスケルトンにも魔力はなかったぞ。さては不死族と契約していた場所から追い出されたんだな？」

ドヤ顔で言い放つカーネギーにムツとした顔のノマナ

「じゃあ俺がだしたゴーレムやお前が返り討ちにされた理由は？」

「は？なぜお前が俺の夢の内容を知っている」

（あーこいつ夢って事で自分を納得させたのか。じゃあそげぶしてやるかね、フッフ）

「クレイ・ゴーレム」

呪文を唱えるとカーネギーの足元から土が盛り上がってヒト型に変わっていく。

カーネギーは急な事に驚いて対処できず、落ちる

「いてっ…！夢じゃない…！」

「クク、ドヤ？」

ドヤ顔をつくってやり返したぜとか幼稚なことを考えるノマナ

「おかしい…なぜだ！なぜ貴様の土人形に魔力がない！」

「いや、独自の魔術？」

「違う！独自の魔術ならこの土人形を見たときから分かっていた。だが、それにしたって魔力なしのはずなのになぜこんなモノが…」
ブツブツ

うっとおしいーという思いを全面的に顔に出すノマナ

しばらくすると”ピキーン”とテレパシー的な物が来る

「お、見つかったみたいだな」

「なにい?!」

「ふむ、どうやら俺のスケルトンを普通のスケルトンと勘違いしてるようだな。仲間の所まで案内しろだよ」

「好都合ではないか」

「あいにく俺のスケルトン二体はちょっと遠目にいる。全速力で来てもらうにしても少し時間がかかる。ちょっと時間稼ぎするか」
「そう言い、案内してるスケルトンに指示を出してスケルトンメイジのいる方向へ進む。万が一間に合わなかったらスケルトンメイジの方が役に立つと判断したからだ」

「まだ2体いるのか」

「ああ、しかも片方は特性魔法の使えるスケルトンだぜ？」

「すけるとんのほうそくがみだれる」

「毒の魔法の射手を使えるのが出たから俺的にはかなり気に入ってる」

「毒？毒の魔法なんて聞いたことありませんよ？」

「いいじゃん、なんか水属性の魔法と併用してるみたいだぞ」

「なるほど…？」

「談笑してる内にスケルトンメイジと合流、残りのスケルトンも駆けつけてきたようだ。」

「じゃあこつちから出迎えに行きますかね、カーネギーは無詠唱で魔法使えるか？」

「む、あいにく魔法は苦手だな、魔法の弓矢を1発が限界だ」

「じゃあそれを隠れて連射してくれ。合図は案内のスケルトンが壊されたらだ」

「ふむ、わかった。」

「所で魔法得意じゃないくせに真祖狩りとか君すごいね！いろんな意味で」

「皮肉かな？こう見えても私は近接の方が得意でね、回復力もなかなかの物と自負してるよ」

「ほう、じゃあ精一杯サポートしてやるよ」

「サポートとは？」

「うーん、相手の攻撃の3割ほど減らす魔法を断続的に送ってやるよ」

「そんな便利な魔法があるのか！」

「まあこれも俺オリジナルだし、正直俺の中では3割ってのが眉唾ものでなあ。相手の攻撃の3割を生身で防げるようならせいぜい気休め程度にしか増えないし」

「生身ということは防具いらずか！それはいい！私にも教えてくれ」

「残念ながら門外不出です。ていうか俺の魔力全部オリジナル魔法使ったためにつき込んだし」

サラツと嘘を吐くノマナ

「む、残念だ」

ダマされるカーネギー

「お、来るぞ。早く隠れる、いいか？合図があつたら魔法連射して俺が呪文唱え終わると同時に殴りかかるでいいな？」

「それで勝てるのか？」

「おいおい、俺のサポート魔法でやられた奴のセリフか？まあよくも悪くもお前次第だ」

「わかった」

それだけ言つと、どっかに消えた

しばらく待つと赤い髪の男がスケルトンに釣れられてくる（誤字じゃないよ）

「ん？仲間はたったの3体しかいないのかね。ん？一人ポコポコの杖を持つてるが魔力はゼロか」

ん？魔力を持つスケルトンだと？面白いな、ぜひ研究してみたいな」

「あーお前誰よ」

「ん？見掛け倒しか、俺は今機嫌がいい、雑魚はさっさと消えな」

「ムツカチーン、アンプリファイ・ダメージ、アイアン・メイデン、ライフ・タップ、ロウアー・レジストおまけに実験でディクレピフアイ」

（今だ殺れ）

一息で呪文を唱え、スケルトンに命令を下す。ちなみに効果は物理、魔法攻撃耐性を下げ、攻撃されると体力を吸われ、攻撃したら倍返しダメージが来るようになってる。

「！どうなっている、スケルトンは自分より上位の不死に逆らわないんじゃないのか」

やはり気づき、避ける赤毛の吸血鬼

だが避けたあとに次々と飛んで来る雷の矢で体をしびれさせる

「グガガガガガガ」

「油断するな！打ち続ける！白兵戦に支障がでない程度で魔力が足りなくなったら白兵戦だ！」

「じゃあもう行くわ！」

「はええ…メイジ！打て！1号はメイジの盾！ボーン・アーマー！」
命令に従い、スケルトンメイジはカタカタ言い始める。それにより何故か緑色の魔法の射手が現れ、飛んでいく。それは見事に電気のしびれから逃れ、なんとか持ち直しておのれ…とか怒りくるってる吸血鬼の頭にあたり…

「ギヤアアアアアアアア」

頭を抑える吸血鬼だがすぐに手を離す、よく見ると手が焼け爛れてる

「 献身のオーラ」、アンプリファイ・ダメージ、アイアン・メイデン、ライフ・タップ、ロウアー・レジスト」
効果時間が心もとないのでこまめに呪文を唱えていく、吸血鬼はハゲになり、頭蓋骨が見えた
頃でやっと溶けるのが止まる。よくみると片目に毒が入ってる

「ver. 酸にしてよかったのかなあ…まじグロイわあ…」
思わずひとりごちる

そこでやっとカーネギーが相手に近づき、頭蓋骨を叩き割り、追撃を入れ、脳漿が飛び散る

そしてぶっ倒れる吸血鬼。よく見れば瞳孔が開ききっていて、回復も緩慢だというのが判る。

「いやあ予想外にうまくいったね！攻撃もこなかったし」

「俺としてはお前が見方で本当によかった…ウツ」
感動したのか水が一筋出るカーネギー

「えーと、大丈夫」

「俺があいつだったらと思うと…、本当にああならなくて本当によかったよ」

「そうかそうか、それで成功報酬をくれないと脳みそまで溶かすよ？さすがに回復力強くても無理じゃないかなー、その吸血鬼だって治るかもしれないけど精神的に崩壊してるだろうし」

「わ、わかった」

「それにしても本当にこいつ真祖かよ、ん？ん？しか言わないただのうるさい奴だし」

「いや、この魔力は紛れもなく真祖だ。しかしこつても簡単に行くとは……」

「まあいいや、とにかく今は飯だ飯！あ、この吸血鬼もらつとくよ」

「まあ証拠さえあればいいか、わかった」

「よつしや、ありがとうん」

許可をもらったので、玉の中に頭が欠けた死体にしか見えないタンパク質の塊を入れる

第六話（後書き）

欲に目が眩んで真祖の吸血鬼を部落に招こうとするお馬鹿一人八ヶ
ー
ン

番外編（前書き）

水属性はオリジナルです

番外編

カーネギーさんとか言う獣人が使ってた魔法の始動キーが”シリアンヌ・プラクティヌ・セリアンヌ”である理由書いていきたいと思
います

結構昔、獣人族と鳥人族が戦争をしていました

獣人陣営には

光・闇・火・雷・治療

が強い人

鳥人族には

砂・水・花・風・氷

と、それぞれ強い魔法がありました。

鳥人族は比較的人が少なかつたんですが、氷で固まった所を凍らせ、砂で体を欠損させる範囲攻撃などを使ってまいした。普通なら精神的にきついのですが、花でごまかしてました。

対する獣人族は火で氷を溶かし、欠損した部分をつなげるとい
う事を続けてました

ある日、獣人族は鳥人族に対抗する方法を見つけました

弓矢です。ルーン文字を刻み込んだ魔法の射手を撃ち出す事のできる特殊な弓矢を武者修業からかえって来た獣人族が持って帰ったのです。

それにより、鳥人族は大打撃を受けましたが、砂を作り、風で獣人たちの農作物にかぶせたところを、水の攻撃で固めたりしました。

獣人族は困りました、獣人族はかなりの人口があつたので、捨て身

で鳥人族に攻め入り、食料を奪おうとしました。しかし、鳥人族はそれを早くから知り、すでに他の場所に逃げていました。

獣人族の間では食料もなく、内戦がいつ勃発してもおかしくない状況で、鳥人族が休戦を持ちかけてきました。条件は鳥人族の治療でした。また、砂、水、風使いはまだいるので、もし裏切ったら延々と食糧難に持ち込んでくる可能性があった獣人は、食料の援助を見返りに容認しました。

そして、獣人族の内乱を抑え、交渉を行ったのち、誰かが言い出しました。最初から戦争なんてしてなければこんなことにはならなかった…と。

また誰かが言いました、それもこれもすべて力を持つ者が集中していたからだ。

結果的に、それぞれの魔法で最も優れた者を長とし、10個の部落が出来ました。

魔法の弓矢を持ち帰った開発者。

鳥人族のえげつない戦術を考えてきた鬼才。

獣人族の内乱を抑え、鳥人族との交渉を行った正体不明。

この三人の女性を讃え、10部落の始動キーはジリアンヌ・ブラクティヌ・セリアンヌとされました。

もともと、今では光・火・雷・水・花・風6部落にまで減りましたが

第七話

カーネギーについて行く途中、うさぎ捕まえてカジツたらカーネギーに引かれた。

腹減ってたんだよ！それにしても口の中が毛だらけでうー！。

あ、うさぎは死んでないしちゃんと逃がしたよ？噛まれそうになっただけ

「お前の吸血衝動はそうやって動物のを飲んで抑えてるのか？」

うーん、どう答えようかな。さすがに憑依してきたばかりだからわからないなんて言えないし。

あと血吸いたくないのは個人的なわがままであって下手するとやっちまうんだよなあ。

あ、そういやこの前考えた仮説があったな。とりあえずそれでごまかそう。

「あーそれはこれを使ってるんだ」

そう言っつて、俺は四次元ポケット（ポーションとスクロール限定）に手を突っ込み、とりあえず

一番小さいヒーリングポーションを取り出す。ちなみにこのポーションは

少ない、軽め、普通、高級、スーパーの5段階に分けられ、スーパー以外は全部血のような色だ

「お、お前、血を集めてたのか…」

「違うから、飲んでみればわかるから」

「いやいや、遠慮しておく」

若干顔が青ざめてる、面白いけど勘違いされるのは気に入らないな

「じゃあー！」

蓋を開けると無理やり口に突っ込み、髪を引っ張って上を向かせる

「んぐう！ん、ん、んん！」

よしよし、飲んでるな。お前もこのまずさを思い知れ

「ぶはあ、殺す気が！」

「で、感想は？」

「なぜ血をわざわざこんなまずくするのかわからん。ハッ、まさか保存料！」

ガコッ

「っ〜」

「だから血いじゃねーつつてんだろコンニャロー！ただの特製ヒーリングポーションじゃ！」

お前の腕切り落として効用確かめてみるか？ああ、大丈夫、ちゃんと一番強いを使うから

うまく切ればすぐにくつつくし」

「す、すまん」

俺の額ら辺を凝視しながら答えるカーネギー。俺が本気だとわかったんだろ。

あと俺いま青筋立ってるかも。

おつといかんいかん、俺は勘違いされる事は大嫌いなんだ。なぜなら生前不良と勘違いされて大学近くにある〇〇食堂で出禁で食らったんだ。まあその後勘違い解けたけど別にいいんだが

「最初に、このヒーリングポーションは見ての通り真っ赤だ。」

「あ、ああ」

まだびびってるカーネギー。だからもう許したつてのに。あ、許すとは言つてなかつたな

「別に何もしない、さっきの事はもう気にしなくて大丈夫だ。今からお前の勘違い解いてやる。」

だから俺はこれを血だと思ひ込んで自分を騙してる。それに、俺が思つには吸血鬼に必要なのは

血の力だ、このヒーリングポーションは特製でとてつもない回復力を誇る。しかも擬似的な血の力が入った優れもの！よっぽどの事がない限り基本吸血衝動はでない。」

実際にこれまでヒーリングポーション飲んでたせいか一度も喉乾くこともなかつたしな。

あれ？もしかしてこのポーション一時的に吸血鬼並の回復力を与える薬じゃね？

…とりあえず入れ物戻しとこ。捨てとくにはもつたないからな

「新月の時も大丈夫なのか？」

「新月？なんでだ」

「吸血鬼はどうだか知らないが新月だと少しだが言葉の通じる不死族でも理性飛んでるんだ」

なんだつて、気を付けないと

「ふーん、そうなんだ」

まあ全然驚いた表情を出さないんだけど。ナイスマイポーカーフェイス

「まあお前が暴走したら俺が止めてやるよ。あの酸のスケルトンい
なかつたら」

そう言つて顔を青ざめるカーネギー。さすがにあの酸スケルトンは
トラウマになつたかな？

King Crimson

King Crimsonの間の出来事

カーネギーからもつと不死族の情報聞こつと思つてたらお前知らな
さ過ぎじゃね？

見たいな事言われて慌ててなんで吸血鬼を倒そうと思つたのかを聞
いたらごまかせた

「…まあいずれ知るだろうが今のうちに話そうか…と着いてしまつ
たな、また今度だ」

しばらく黙つてたと思つたら考えてたんかよ。しかも言つと思つた
ら着いたとか気になるじゃん

門は大きく、城壁は高い木で出来てる。

「門番！帰ってきたぞ！俺だ、カーネギーだ！」

「おう、カーネか、どうだ、見つかったか。」

「おうよ、見つけたどころか捕まえたぞ」

「ほー、そらすごいな。吸血鬼の眷属なんて捕まえるなんてよ！力
力」

「こいつはちがうさ、それにこいつは魔力ない割にはすげー力持っ
てるんだぞ？」

「なんせ俺を倒したんだからな」

「あ？それはお前がなめてかかったんだろ？クク、言い訳してんじ
やねーよ。」

「まあちよっくら報告してくるぜ」

「あいよー」

待つことカーネギーと俺は真祖だ！嘘つけ！見たいな口げんかがピ
ークに差し掛かったとき

「カーネギー、鳥人族の女と番つがいになっただけでなく吸血鬼の手下に
なるとは情けない」

「長老様、なんのことでしょう」

「とぼけるんでない！見たところ吸血鬼にはなっていないようだが吸
血鬼と一緒にいる
という事はどうせ負けて魔法で何かされたのに違いない！それにな
ぜ人間などと一緒にいる！ましてや魔力のない！」

「ああん？！テメエら俺は真祖の吸血鬼だっツーの！あとお前らの
探してる真祖の吸血鬼って

こいつのことか？」

いい加減むかついた俺はそのまま例のタンパク質を玉から放り出す。治り方汚いけど治ってるな

「こ、コヤツ、同胞を手にかけて…なんじゃと！この魔力、真祖級ではないか！」

「当たり前じゃアホ！俺がこいつと一緒に捕まえてきた正真正銘の真祖じゃ！」

いいから食いもん寄越せ！

いかんいかん、思わず本音が

「お、お前長老様になんて口使いを！」「カーネギーにどやされるけど無視無視

「うーん、ギリギリ生きてるけど血の力が尽きてなかなか回復できないってとこかな。

まあ回復した姿を見れば信じるだろ」

「お、お主まさか血を飲ませる気か！や、やめろ！」

なんかクソジジイが焦ってるけど気にしない。ノーマルぐらいで行けそうかな？

とりあえず蓋を開けて口に流し込む。これでだいたい復活しても抑えられるぐらいだろ

すると、タンパク質はどんどん髪が生えてきて、人間ぽくなってきた。

てあれ？なんか全回復してないですか先輩。H A H A H A、…暴れないでくださいね？

「あ、ああ…一度まぐれにしる負けた事を怒ってるに違いないぞい、とばっちりじゃあ…」

「ジジイがガチでびびってるこれはアイアン・メイデン先にかけてくか？」

「あ、あうー？」

「起き上がった赤毛の吸血鬼は純粹そうな目でこちらを向いている。思わずかわいい！」

「と思いきやそうになる。俺はノンケだ俺はノンケだ俺はノンケだ…そう念じてたら」

「あーあー」

「お、おい、ネクロ、どうなってんだ」

「くそ、人の現実逃避を邪魔しやがって」

「たぶんお前が脳みそ完全にふっ飛ばしたからじゃね。完全に幼少期状態」

「なん…だと…」

「なんと恐れ多いことを…」

「あの爺さんまだ正気戻ってねえな。隣の門番ばいのもう持ち直したのに」

「長老様！長老様！」

「ハッ、つてなんじゃと！あの我々が手も足も出なかったあの真祖が子供のようじゃ！」

「揺さぶられて正気に戻ったようだな」

「しかし、これは認めざるおえんな…よかつ、約束は約束じゃ。お前と彼女の結婚を…許そう」

「ありがとうございます！長老様！」

「あれー俺空気ー？おいカーネギー、飯は？まさかタダ働きじゃないよな」

「え？あ、そうだな。お前も俺の結婚式に出てくれよ」

「だめじゃ、そういうわけにはイカン。いくらお前と吸血鬼が協力したとはいえ、

吸血鬼は吸血鬼じゃ。油断ならんわい」

「長老…そこをなんとか」

「ならんもんはならん！」

「俺は好きなときにお前から可能な分だけ食料をもらえる権利さえあればいいぞ」

「なんと、真祖を倒してその程度でいいじゃと？」

「あ、そうだ。あとこの真祖は俺が引きとるわ。あと教育係募集」

「ふむ、教育係に護衛を付けるがそれで良いか？」

「あいよ」

そこで俺は神がかった直感が冴える！

「食料は文字道理食料だからな！肉とか野菜とかだぞ！血じゃないぞ！」

「そ、そうか。わかったぞい。」

「ちゃんと部落に誓った上で許可証よこせ」

「慎重じゃのう…よかろう。わしはこの6部落”雷”の威信に誓って貴様との約束を守るう！
おい、書く物を持ってこい」

「はっ」

待つことしばらく

「持ってまいりました」

「…苦勞」

そう言つて渡された石版を片手で持ち、何かをブツブツ言いながらもう片方の手を動かしていく

最後に

「ほれ、これで良いじゃろ。」
「
投げてきた

「あつぶね。どれどれ？」

我ら六部落”雷”の英雄に贈る。

これをもつ限り、我々は食料の提供を余裕がある場合、可能なかぎり行うことを長老の名で誓う

血印もあるし、おkだな

「よし、カーネギー。長老の後ろにお前の名前いれて血印しろよおら」

「なぜだ」

「とりあえずお前の事情はだいたい予想ついた。鳥人族の女と結婚するために真祖を倒すんだろ？普通なら無理だろ。だけど俺の協力により、それが成功したんだ。万が一のための保険だ。これぐらいいいだろ」

「まあ事情は大体お前の言うとおりだよ。わかった、やってやるよ。そうだな、そのかわりに一文加えていいか？」

「言ってみろ」

「我、サンダーの名を継ぐ者共と友とし、将来会うことがあったのならば、

可能であればお互いを助け合うべし」

「ふーん、まあ継ぐ”者共”は気に入らないが”可能”の部分は俺が嫌なときは

不可能とみなして拒否していいというのも含めてもいいんだな？」

「ではこちらもその条件ならばいいだろ」

「よっしゃ、契約成立つと！」

お互い血印を書く。すると、石版が光りだし、ルーン文字に変わる。
(カーネギーおよびノマナはルーン文字だという事を知りません)

「じゃあ、早速飯くれ」

「わかったわい、すぐに用意して持って行かせる。本当にこれだけで良いのか？」

「真祖を倒したのじゃぞ？」

「うーん、俺的にはこいつをちゃんと育てて人を襲わない様にすればいいだけだし…」

「そうだ！将来のことを考えてお前らの使ってる弓をくれ」

「ふむ、それなら良いじゃろ。待っておれ」

「あいよー。じゃあな、カーネギー。」

「ああ、縁があればまた会おう」

「そう言っ、カーネギーは少し開いた門の隙間を通って入っていった」

第七話（後書き）

風景描写難しすぎる。てか挟むところなくね

第八話（前書き）

それなりにKing Crimson

結果

- ・吸血鬼の名前はキュー・ネクロアンデットになりました
- ・キューの教育は約20年です
- ・教育の内、魔法に関しては基礎だけ教えて弓与えました
- ・2400年Dialoの不思議なダンジョンに籠もってました、でもたつたのは100年。
- ・空の方の玉の一角が死体で埋め尽くされています
- ・吸血鬼さんはいろんなオリジナル魔法を覚えました。ここ大事！オリジナル魔法のアイデアプリーズ！
- ・主人公と吸血鬼さんは2400年ひたすら不死族たちをぶっ殺してたので感覚が狂ってます（具体的には不死族⇨経験値）
- ・ゴールデンエリクサークエストをクリアしたので、ラボーンスピリット用の忠実な下僕ができました。

第八話

ある日、やっと俺たちは最下層にいるボスらしき奴を倒した。達成感が半端ない

(あーもしもし？お久しぶりです。まさかこんな早くクリアするとは思いませんでしたよH A H A H A)

「誰だお前?!」

「お父さん?」

「いや、なんか声が聞こえて」

(嫌ですねー、神様ですよ神様。あなたが名もなき最上神とか名付けた神様ですよ)

「あ？神様？どゆこと?」

(うーん、記憶とつくに無くなってますね。えい)

「ぎゃあああああ頭が割れるように痛いiiiiiiii」

「え？お父さん？あ、早くこれ飲んで」

そう言って渡してきたのは高級ヒーリングポジション。気がきくなあ

ぐくぐくぐく

ふう、やっと一息付いたってなんだと…

「俺はすべてを思い出した」

「お父さん何言ってるの？」

「ああ、説明は後だ。ちょっとまってくれ」

「うん」

(記憶返してくれてサンキュー)

(いえいえどういたしまして。それより次の難易度のナイトメアですが…)

「ああん？」

思わずビキッと来て声にだしてしまっ

「お、お父さん？」

「ちょっと黙っててくれ」

「…はい」

(今なんて言った?)

(え?ですからもう一個上の難易度の”ナイトメア”はいかがと思
います?)

(これで…終わりじゃない…?)

(そうですね。ナイトメアの上の一個の”ヘル”ってのもあります

けどうぞします?)

(俺らに一生をここで埋めると)

(いえいえそうは言ってませんよ。それにデメリットどころかメリットはありますよ)

(どんな)

(新たな魔法をいくつか開放+すべての能力の熟練度がもう一段階上に上がります。)

(いや、今ので十分過ぎるぐらいだろ)

(まあまあ、ナイトメアは今の2倍、ヘルは3倍相手が強くなるので実質最初からですし)

(余計やる気なくすわ…今でもチートすぎるのに)

(どうぞします?)

(また今度って事で)

(了解しました)

(おまけと言っちゃなんだがクリア特典こいつにも付けてくれね?)

(何を言ってるんですか、その子すでに外に出ればひとりで2、3国相手できますよ)

(は?)

(いえですから魔法の射手を1000発単位をまるで一流の魔術師が10発撃つかのようにしてたらそれはチートってレベルじゃないですから。しかも即死魔法いくつもあるし)

(そ、そうか)

(まあどうしてもというのなら壊れない玉をもう一個上げますよ)

(キター!)

(じゃあそういう事で、お疲れさまでした)

(あー)

「よっしゃ、喜べ我が息子よ、玉がもう一つ手に入るぞ」

「さつきからどうしたんですか、お父さん。いくらクリアしたからと言って壊れちゃうとは思いませんでしたよ」

「いやいやいや、俺にこのネクロマンシーの力をくれた人が今の2倍の強さの状態でもう一回やらないかみたいなこと言ってたからちよっと拒否してたんだよ」

「いいじゃないですか」

「俺いやだからね？俺嫌なんだからね？外の世界に行きたいんだからね？」

「外の世界？お父さん何を言ってるんですか。ついに頭おかしくなつたんですか？」

「……………」

「お父さん？」

俺は無言でキュウの腕をつかみ、玉の外に出る。

出た場所はたくさん物が飾ってある部屋だった。

「こ、ここは…」

目を見開くキュウ

そして俺も驚いた。なぜなら俺らが玉に入り、長らく帰らない事を見越し、入った後、保管させる事を契約を盾にカーネギーに約束させたからだ。なのに今は宝物庫にも見える部屋。どついつこつた

「お父さん、すごいよ！ここに置いてあるアイテム全部マジックアイテムだよ」

「そつか」

「お父さん？」

「おかしい、なんでこんな所になってるんだ。いや、これだけ時間が立ってるのだから当たり前なのか」

「お父さん？」

「何だ今考えるのに急が「貴様ら！どうやってこの宝物庫に入ってきた！」ビキッ」

考えを止められてむかついたところに腹がでかく、頭がはげてるおっさんが怒鳴って来た

そのあとに数人の武器と杖を腰に差した兵士らしき者がいる

「この中から出てきた」

俺は無理やり自分の怒りを抑え、答える

「嘘も大概にしろ、その帰らずの魔法球帰った者はまだアングス・ベネディクト様だけだぞ！」

「じゃあ俺たちで3人だ。それよりここはサンダーの家系の物か？俺は答えながら、注意深く相手を観察する

「ベネディクト様の話によると中は不死族の巣窟らしいじゃないか、杖を持つてるのを

見ればお前らも魔法使いかもしれんが、その程度の魔力で生きていられるわけがない。それに

サンダー？ああ、六部落の一つにそんな奴らもいたな、愚かにも我々正義の魔法使い達に

楯突いて一部を除いて皆殺ししたっけな」

「ねえキューくん、こいつらの血すっでいいよ、死なない程度なら」

「えーやだよーあいつら汗くさそうなんだもん」

「うーん、そうかー怖い目に会いたくなければもうちょっとそれについて詳しく」

「何を言ってるんだ貴様」

デブが喚き散らしてくる、もうやっちゃっていいんじゃないか？だ
けどこいつが一番の上司らしいし生かしたくないと。とりあえず

「テラー」

その者の最も恐れる幻覚を見せる

「ひっ」

まず音を上げたのが話しかけてきたおっさん、その後後ろにいた一
人の兵士がかかる

「アイアン・メイデン、アイアン・メイデン、アイアン・メイデン」
いざ攻撃してきても困るから倍返し呪いをかけておく

「クレイ・ゴーレム」

逃げられないように出口を塞ぎ

「うわああああ」

泣き喚くクソデブを杖でアッパー

「魔法の射手 炎の十三矢」

油断無くこちらを伺ってた残りの魔法使いの一人が反応して魔法を
打ってきた

「バカめ」

「グッ」

それを受けてあげた。燃え上がってるけどキューくんがすぐ何とかしてくれるでしょう。

「水よ」

バシヤア

水が落ちてきて火が消える。うん、さっすがキューくん

「ぐ、グアアアアア」

その間、魔法を撃ってきた本人が燃え上がったかのように黒い炭になる

「な、何をした貴様」

その様子にビビる残りの兵士たち、良い気味だ

「なに、ただ与えたダメージの倍受けてもらったただけですよ」

そうさりと答え、黒焦げになった肌をポリポリとひっかく。黒い皮膚が落ち、その下から現れるのはきつと白いきれいな肌。

「その回復力、吸血鬼か！」

お、気づいた

「ごめーとー、レイジ・スケルトン」

スケルトンを出せばどんな反応なんだろうとちよっと思いながら焼けた男の死体に杖を向け、呪文を唱える

「な、何を」

「見ればわかるさ」

バチヨツ

死んだ男の肉が鎧の隙間から軽く飛び出て、中から骨だけが出てくる。スケルトンだ

「う、うわああああ不死族だああああああ
ハゲデブはうるさく叫び

シャリン

兵士たちの半分はすぐさま魔法を打つ

「魔法の射手 炎の24矢」

うん、いいコンビネーションだ。隣で見ていたキューが不思議そうな顔をしている。どうせなんでそれぐらいしか出さないんだろうとか思ってたろう。俺も記憶戻してもらわなかったら思ってた

だけど俺のスケルトンには全然足りないな。なんたって特製だし

「こ、こいつ、魔法が効かないぞ！」

「さてみなさん。私たちは見ての通りあなたたちの格上、そして吸血鬼です。しかも見ての通り

魔法の効かないスケルトンを作れます。そして君たちを彼のようにできます。」

そう言つてハゲデブを指差す。全然元に戻らないな。効果時間は確か1日だっけ

「あ、あ、あ、あああああああああくるな、くるな、くるんじゃないいうわあああああああああああ」

指した方見て、兵士一同は全員顔色が青ざめ、中にはヤケになろうとしてる奴もいる

「ただし！」

突っ込もうとする奴を止めるために大声を上げる。みんなビクつとした。フフ

「私たちに何が起きたのか教えてくれれば助けあげますよ」
兵士たちは、落ちた

King Crimson

結果的に分かったのが

・ 獣人族と鳥人族の6部落を中心とした亜人同盟相手に魔法使いが戦争仕掛ける

・ 英雄、アングス・ベネディクトが介入後、圧倒的な力で押していく
・ 現在のだいたい獣人や鳥人などは奴隷以下

「ふーむ、胸糞悪い話だな。よし、俺が人間滅ぼそう」

それを聞いた兵士達がさらに青ざめてる。だけど一人が豆電球に光がついたかの様な顔をする

「では国を作ればよろしいのではないのでしょうか、いくらあなた様でも全人類を相手にするのは厳しいのではないのでしょうか」

「じゃあお前ら」

「は、はい！」

「この屋敷にいる人間以外全員一番広い所集めて俺をそこに連れていけ。その後人間全員引き連れてどっか行け、逃げてもいいぞ。あと一週間だ。一週間後人間を虐殺するから噂を流したほうが助かるぞ」

「了解しました！」
一部顔がにや付いてる。どうせ軍を呼ぶんだろ、バカめ

「キュー、ちよつと外に軽く魔法の射手撃って」

「お安い御用 魔法の射手よ 火の矢闇の矢氷の矢 それぞれ1000づつ 敵を撃て」

「窓を見てみましょー」

俺は笑いながら兵士たちに言った

兵士たちは外を見て、キューの余裕そうでにこやかな表情を見て、心なしか顔に絶望が浮かんでた

King Crimson

どうやらここは城だったらしい。広場に獣人やら鳥人やらたくさんいて、全員どことなく

怖がっているようだ。男1女9という割合で、人間はいない。

「よし、ちよつどいい。お前ら聞いてくれ！俺はノマナ、この城に乗っ取った！一週間後にある程度の領域の人間を全員殺して、人間と不死族以外の種族の国を作るつもりだ。そして、お前らは普通に

暮らせばいい。代償は俺らが飯をたかっても拒否しない程度でいい。あと人間と恋仲になるなら国外追放だ」
反応はいまいちだ。まあそりゃ話が旨すぎるからな

「本当にそんなことができるのですか？」
気の強そうな獣人の一人が聞いてくる。

「できる。信じなければ付いてくるがいい。今から力を見せてやる。俺とこいつは吸血鬼だ、

そして血を吸わなくても生きていく手段がある。だから大丈夫だ」

「ですがそんなことをしても人間達と戦争ですよ?!勝てるわけがありません!」

「ならば勝てる程の力を持つ事を証明してやる。付いてこい」
そこまで言うとは話は一切受け付けないと意思表示する為に出る。

「じゃあ、まず俺の切り札から」

そう言つて、現在玉に入ってるスケルトンを全部出す。たしか7000体ぐらいいたはずだ、最大で1万だけど。

「「「おお」「」」

「失礼ながら、これらは全てあなた様が？」
一人が話しかけてきた

「そつだよ」

「なおかつある程度の命令に従うと」

「まあ一体一体にそれぞれ命令を出してたら時間が足りないからね」

「まさか、この数を全部ちゃんと操作できるとおっしゃるのですか！」

「そだよ、次は僕の息子の力を見てほしいね」

そう言つてキューに視線を向ける。奴隷たちもキューに視線を合わせる。面白いかも

「キュー、ちよつと限界まで魔法の射手だして俺のスケルトンに撃つて」

「はい、お父さん」

やつと話しかけてもらえたと言わんばかりの笑顔だ。…この考えがそれがただの思い上がりであつてほしい。しかもほんのり顔が赤くなつてるのは間違いに決まつてる

「風よ・闇よ・雷よ、氷よ・火よ・砂たちよ　すべてが矢となり敵を撃て　魔法の射手　混合6万矢」

すべてが俺のスケルトンに飛んでいく。いやー壮観だねー。努力の決勝がクレーターと共に消えたねー。そう考えると目から血がでそーだよー

「そ、そんな馬鹿な」「じゃあさっきの魔法の射手もこの方が」「これならあるいは…」

ざわざわと周りが沸き立つ。

「幸い、さっきも言つたように俺とこいつは吸血鬼だ。故に寿命もなく、

これからも強くなつていくだろう。だから、俺は今日ここから亜人

達の国を作る！」

「「「おおおおおおおー！」「」」

「じゃあ、一週間後だ。ただし、屋敷の人間で殺したいやつらがい
たらまずそいつらを殺そう」

俺はそう言っつて、死体を50数体出し、スケルトンに変えていく

「レイズ・スケルトン、レイズ・スケルトン、レイズ・スケルトン、
レイズ・スケルトン……」

「す、すごい、あれだけスケルトンをだしてもまだ余裕だ」

「よく見るよあれ、死体が全部不死族だぜ？」

「これなら普通に暮らしていけるかも……」

「ざっとこんなモンだね。さあ殺したい人がいればみんな連れて行
つて。屋敷にいる限り殺してもいいからね。足りないなら言っつてね。
入り口出口塞いで交換で殺しに行くのがおすすめだけど」

「なるほど」

「それなら確実に……」

「早い者勝ちだ！」

そんなこんなで、屋敷の殺戮は始まるとさ

King Crimson

第八話（後書き）

スケルトンに魔法の効果あまり効かなかったのは、魔法ダメージ半減と元の体力が半端なく高いからです。サモン・レジストとスケルトン・マスタリー

第九話（前書き）

普通に書く気がなかった

ていうか考えれば考えるほどストーリーが思いつかない
だから適当に書く事にした

第九話

屋敷を占領して6日目の夜、バルコニーでキューがコウモリに向かってなんか言ってた

「キュー、どうしたんだ」

「お父さん、魔法使いが来たみたいだよ？」

「おいまさかそのコウモリが教えてくれたんじゃないだろうな」

「そっだよ」

俺昨日無視されたぞ、どっという事だ

「そっか…それで数は？」

「んー80人位？」

「迎撃して拷問して報復行きますか」

「りょーかい」

話を終わると、俺はそのまま走って外に出た

キューは何故か俺より外にいた、俺がでたとき見なかったぞ

「お父さん遅かったね」

「お前どうやって出てきたし、魔法か、魔法なんだな？」

「やだなー、飛び降りたに決まってるじゃないか」

「お前回復するにしたって骨折はもう少し時間かかるだろ」

「え？怪我なんてしてないよ」

「は？」

「最近飛び降りごっこにハマって飛び降りてたらいつの間にか五点着地マスターしちゃってね」

「なんだって…」

「まあおふざけはこれぐらいにして来たみたいだよお父さん」

「わかった」

そう言つて、補充しといたスケルトンを5体ほど出しておく。キユーの方を見ると弓を構えていた

「あと少し、あと少し、今かな？」魔法の矢 拡散氷結”
そんなこといいつつ、氷の矢をつがえ、撃つ。

前の方にいた近接武器を持った兵士の格好の奴らの足元に飛んでいく、それに反応した数人が
飛び退く。うーん、さすがの練度かな？まあ足りないけど

当たった地面から小さな氷が爆発するかのよう弾け、それらにあたった人の足が凍りつく
そこにすかさずだしといたスケルトンを突撃させる

「父さん、毒のスケルトンだしてよ」魔法の矢 拡散雷撃”」
そういいながら黄色い矢を魔法使いたちの上空に射る。そして雷撃
が落ちて行く

「すまん、忘れてた。でも溶かすより凍らせて見せしめにしたほう
が良くないか？」

「なんでもいいよ。それより逃げそうだからもっとスケルトンだし
て困んでよ」

「把握」

そして作り溜めしといたスケルトンを60体ほど出して横から回り
こませ、
スケルトンメイジを出す。

「お、ちょうどいい所にしたい発見。さすがだ」

「あたりまえだね、何せ父さんの子だからね」

「そう言ってくれると嬉しいよ、」コープス・エクスプロージョン
”」

軽口を叩きつつ死体を”爆発”させる魔法を死体にかける。周りに
いた者たちは常時障壁
をつくっていたみたいだが、中には吹き飛ばされた奴もいる。それ
も当然のことだ、

爆発自体は魔法でも爆風は物理の分野だからだ

「レイジ・スケルトン”」レイジ・スケルトン”レイジ・スケル
トン”」

追い打ちで死体からスケルトンを作っておく

「クソ！まさかこんな死者を冒瀆するような魔法があるとは！」

「それより何だこの魔法は、さっきから見たことない魔法ばかりだぞ！」

そんなことを言いつつもちゃんと射手を中心に確実にスケルトンを殺して行く魔法使いたち

「おいおい、お前ら仲間の骨だぞ、もうちょっと優しくしてやれよ」
半笑いで挑発してみると

「うるさい！貴様らがそのような魔法を使ったからこう言うことになったのだ！よくも

ジェリーをトムを不死族にしてくれあばばばばばば」

俺の挑発に乗った一人が注意散漫で”魔法の矢 拡散電撃”にあたつてた

「プウークスクス」

片手を口に当てて笑うと

「ジミー！貴様よくもおおお！」

さっきの電撃で炭化した死体を涙を流しながら駆け寄り、俺に叫んできたときに

「レイジスケルトン」

炭化した死体をスケルトンに変えてあげた

「グアアアあああ」

一度の挑発で2度美味しい。彼はスケルトンに切られて死んだとさ

「ば、化物だああああ」
20人程殺した頃に誰かが叫び始めた

「こ、こんなのに勝てるわけがねえええよおおお」

「カーチャン、先逝く不肖な息子をお赦してください」
そんなセリフまで聞こえてきた

「なあキュー、このままこいつら逃がして俺らの怖さを広めたほうがいいと思うんだ」

「わかったよ父さん、少し手を抜こうか」

「ん、よろしく」

そう言っただけ俺も少しだけ逃げ道をつくってあげる

「クソ、このままだと全滅するぞ！逃げるんだ！」

「死にたくないよー」
正しく阿鼻叫喚だった

その時何を思ったか俺は後ろを振り向いたら元奴隷たちがこっちを見つけた。

俺がニコツって笑ったらみんな顔をこわばらせて屋敷に入っていた。怖がらせたかも

そうして、最初の戦いは見事白星スタートだった。

第九話（後書き）

とりあえず勘弁してください

文才がほしい。人の作品読むだけで身についてくれれば楽なのに
もっとも努力やら勉強やら一切するつもりはないんですけどね！

やり直し 第一話

side - ????

そこは真つ白な空間だった。そしてテーブルがおいてあり、テーブルの上には変な物が乗っかっている。そこには一般的に言う”老人”に見える男と金髪の幼女が座っていた。それは傍から見れば和気あいあいとした祖父と孫に見えただろう。

「それで、本当にこの人が僕の代わりに信者、もとい世界を作ってくれるのですか？」

「そうじゃよ、少なくともわしの占いではそうでした。とりあえず今その男は死のうとしとるぞ、たすけたほうが良いのではないかの。」

「えっ、それはこまるよ！」

side - out

side - dokuo

今日はクリスマスイブ、そしてもうすぐ魔の時間帯、いわゆる性の六時間に突入する時間だ。

サカリの付いた隣人のバカップルどもがギシギシアンアンギシギシアンアンギシギシアン

そして無職になったドクオやけになり、賭けにでる

一酸化炭素の濃度が致死量が部屋に充滿する前に
見知らぬ愛らしい女の子が「お兄ちゃん」って
玄関からお邪魔してくることに
綺麗な鏡が突然目の前に現れて
ツンデレピンク召喚されることに
紫のBBAではなく少女に幻想郷に招待されることに

生死を賭したのだ

「まだ練炭買ってきてなかった」
そうドクオはつぶやくと、財布をポケットにツッコミ、外に出る
「しかし出てきたのはいいけど練炭なんて売ってるかなあ」

(練炭ありますように！いや、やっぱり買っても怖気付いちゃってやらないくらいなら買わない方がいいかも)などと葛藤しながらドクオは商店街目指して歩いていると

「ブブーキキーブブー」

「え？」

トラックが走ってる前に幼女が立ちすくんでいた

ここでドクオは

(どうせ練炭で死ぬくらいならカツコ付けて死んだほうがよくな？)
ここまで考えたのが0.08秒、そして

「イエツスロリータ！ノータッチ！だけどエマーゼンシーはノーマントアイ！」

と叫びながら幼女に突っ込む

「トオーぶへし」

が、途中で何も無いのに何故かつまずき、幼女を突き飛ばしてしま
う。

そして

「ママーーーーー！！」

ス オばりの声を張り上げ、彼は

グシヤ

やり直し 第一話（後書き）

前回はなぜ神様が自殺を止めに来たなどの描写がない、スケルトン・メイジは手に”力”を宿してそれを打ち出しているので描写が間違っていたる、NAISEIさっぱりな僕はご都合主義キャラでごまかしたいなどなどの理由から書きなおさせていただきます。

申し訳ございません

第二話

side - god

場所は変わって例の白い空間とテーブルと椅子。そして焦った顔をした少女は両手をテーブルに着いておじいさんに一気にまくしあげる

「どどどどどっししましょう死んでしまいましたあわわわわ」

「まあまあ落ち着かんかい、大丈夫じゃ、そういう人間には奴らの世界の二次創作の世界になにやら力を与えて転生させれば何もいうまい。」

「で、ですがそれでは私の信仰者を集めるやらなんやらは…」

「心配せずともなるようになる。どうなるかは今言っては面白くないからの、ただ必要な時はアドバイスはしてやるぞい。」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ早速アドバイスじゃ、仮契約をしとけばあ奴とお主の魂はつながる、じゃからあ奴が崇められるようなことになればお主にも影響がでるんじゃ」

「な、なんと」

「偉そうにしてたらあやつは怒るかもしれんぞ、ちゃんと誠意を持って謝らんな。わかるな？」

「どうすればいいのでしょうか」

「それはの…」

side - out

side - dokuo

「知らない天井だ。」

とりあえず言ってみただけこれ天井あるのか？

あたりはどこを見ても真っ白。目が腐ったのか？とか思ってた中、ここに来る前に見た気がする幼女がだんだん浮き出て？来て、ちゃんとした色になった。

(どういう事なの…)

きつと俺はこんな顔をしていただろう。(。、。)

なぜなら幼女が土下座で出現したからだ

「さすがに俺も反応にcom「すみませんでしたー！」「」

「本当にすみませんでしたあああああ」

こ、これは…イミフ

「あなたが見知らぬ幼女が訪ねてくる事に死ぬかの賭したと聞いてまだ死ぬ運命じゃないから

賭け勝たせてまだ生きてもらおうあげようと思ってあなたの家に行

「こうとしたんですが逆に死亡させてしまいました」
息継ぎもせず一気にまくし上げる幼女。

これはもしかしてチート転生フラグか？

「そうです！」

「え」

「あ、私実はまだ初期状態の世界しか持っていないのであんまり大層な能力だと弱体化されます」

「それでもチート出来るの？」

「…そもそもしいきなりチートして無双するゲームって面白いですか？面白く無いですよね、そうですよね」

「え、あ、うん」

「じゃあ能力ですね、どうぞ」

とりあえずわかる能力じゃないとキツイよな

「Diablo2のネクロマンサーの術を魔力消費で無制限に使える、Warcraft3のヒーローのレベルマックスのオーラ全種類、Warcraft3とDiablo2に出てくるすべてのポーション無限に取り出せる絶対に壊れないポーチを一つ、Diabloシリーズで出てくる敵が入っていて倒しても入るたびに復活する壊れない別荘と壊れない空の別荘20代の姿の真祖の吸血鬼に憑依でスタートする。指定世界は”ネギま”。…あ、別荘ってのはエヴァンジェリンの持つてる奴ね？あと吸血鬼は吸血鬼のおしごとの吸

血鬼で弱点全部なしね。」

「どうしたの？」

「世界も決めちゃいますか…あとこれ行けるかなあ」

「じゃあもつと増やすか」

「いやいやいや、それはもつと勘弁して欲しいんですが…」

仕方ない

「じゃあ全部原型留める程度で弱体化していいよ」

譲歩したるよ

「本当ですか！ありがとうございます」

この言葉に満面の笑み

「」

ロリコンに目覚めてもいいかもしれん

「うーん」

しばらく考え込む幼女、どうやら心で思ったことは気づかれてないようだ…？

「」
「」
「」
紙を出して渡してきた

・ネクロマンサーの術は代償なしで使える、ただし術に必要な物がある場合、それがなければ使えない。威力、質、数などはすべて熟練度によって変化する

(うん、熟練度をあげれば強化かもしれん)

・1日1オーラポイント上限を上げる。オーラ1秒につき1オーラポイントを消費。2秒で1オーラポイント自然回復する

(別荘使えば結構行けるから許容範囲内だな)

・WC3のポジションは補充までしばらく時間がかかる。だいたい1日に1本。

(まあ攻撃できなくなる無敵ポジションとか一瞬で超回復するヒーリングポジションとか透明になれるポジションとかチート臭いのいっぱいあるからな、補充されるだけましだろう)

・Diabloの敵が出る別荘はふしぎなダンジョン形式、体に乗っ取られる系は起きない

(忘れてた…diablo1では魔王倒すと魔王になるんだっ…)

・魔力も気も一切持たない吸血鬼に憑依してもらおう

魔力も気も一切持たない状態で憑依

魔力も気も一切持たない状態で憑依

魔力も気も一切持たない状態で憑依

(なん…だと…)

「あ、その点についてはネクロマンシーをなにも代償を払わずに使えるのでそれ以外にも魔法使えたらチート過ぎると思ひまして…」

「ぐぬぬ…」

「じゃあ…呪いが効かない体にしましょうか？」

「む」

「今ならディスプレイ系の魔法であたのネクロマンシーやオーラが消える事がなくなりますよ！」

「ディスプレイなんて使うやつそうそういないだろ」

「…ハハハ」

「精神系は自分が望まない限り一切効かないようにをプラス」

「…はい」

「あ、聞き忘れてた。俺以外にも転生者とか憑依とかする人いる？」

「いないですが…あなた以外にもいます？」

「いや、いれないください」

「わかりました、何年前ぐらいに送りましょうか」

「じゃあ原作開始の1000年前からで」

「わかりました。では」
チユ

「え、え、え？」

なぜキスされた？もしかして俺に惚れてる？マジで？え？え？え？え？
あれ、カードが出てきた

「仮契約です。ではよい旅を」

カードを渡されると

俺の目の前は真っ暗になった

第二話（後書き）

パクティオーで魂繋がって神様と崇められれば神様も神力アップ！
とかの下りはオリジナルです

第三話（前書き）

吸血鬼の能力確認回です

話は進みません

仮契約のアイテムの説明忘れたから追加

5 / 2

第三話

出てきた所は崖だった

「おお・・・」

でも絶景だった

下に広がるのは一面の森、川が流れ、鳥が飛んでいる。まさに大自然そのものだった

「おっとそうだった、あの神様とか言うやつが仮契約バクテイオーしたって言うてたな」

そう言うって取り出すのはカード

「どれどれ・・・」

主神

名前表記 ????????

称号 チートネクロマンサー

色調 金・銀

徳性 正義

方位 北

星辰性 冥王星

アーティファクト 三種の神器

描かれてる姿は銀髪で短髪の男がローブを羽織っている姿。

よくみるとこのローブナイトローブだ

「なるほど、でも名前がないな。おかしいな、たしか俺の名前は…
名前は…!!!!」

「おかしい、俺が俺の名前を忘れてる?!」

整理にだいたい10分後

「まあいい、とりあえず違う世界に来たんだ、新しい人生を歩むんだから名前自分で付けよう」

思案中・・・思案中・・・

「魔力がないからノマナ…ん？待てよ？俺確かネクロマンサーだから死霊呼び出して未来なんて名乗ってるか占えばいいんじゃない？うは、俺天才かも」

そう言っただけで始めようとするが

「道具がない…だと…」

「もういいよ、安易に行こう。魔力がないからno manaでノマナ。死なないからアンデット。ノマナ・アンデット」

するとカードの名前の欄にそれらが書き込まれる。

「これでいいな、じゃあアイテムの拝見くアデアット！」

出てくるのは左の人差し指についた指輪。

「なんだこれ、三種の神器っていつから三つあるのかと思ったのに…ん？おお、なんだと」

「アデアット！」

すると指輪は骸骨が付いた1m半の杖だった

「アデアット！」

もう一度唱えるとそれはダガーに代わり

「アデアット！」

さらに唱えると指輪に戻った

「これはパネエかも。形態に合わせた技の熟練度を二倍にしてくれるとは」

「指輪が呪いで召喚と骨が杖で毒物がダガーって所か。よし、次は吸血鬼だな」

「イメージするのは狼に変身した姿…右腕が狼になる姿」

すると右腕から毛が生え始め、数秒待つと右腕が千切れ、狼となる。

「ひっ」

グルルルル

「いや待て、こいつは俺だ、ビビる事はない、落ち着け、落ち着け、落ち着け……」

「ふう、落ち着いた。とりあえずお前の名前を決めてやる」

その言葉に狼の口元が釣り上がった…ように見えた

「騙狼、狡猾に相手を騙して仕留めるような生き汚い狼、それがお前だ」

狼の笑はより一層深くなったように見えた

「まあいいや、次、コウモリ」

残った左手の指がコウモリになるのを想像する

「できた…」

どこか疲労しながらも満足そうにコウモリを見るノマナ

「これは血の力使い過ぎたかな、そういえばポーションで血の力は回復するのだろうか」

そう思い、コウモリを戻し、ポーチに手をつ突っ込んで赤く、少し大きめなポーションを取り出す

グレーターヒーリングポーションだ

「んぐ、んぐ、んぐ、プハー」

飲み終わるとすぐに力がみなぎってくる

「おお、これはチートすぎる。最後は霧だな」

自分が霧になるのを想像する

- できたカナ・・・ -

- 騙狼俺に向かって突っ込んでこい -

騙狼はなにやら戸惑いの表情をしながらも突っ込んでくる

すり抜けた

「キタコレー！」

実体に戻り、騙狼を腕に戻すと、ノマナはその場で飛び上がった

「でも霧は消費でけーな」

ポーションを飲み直しながらひとりごとをいう

「あとは気配感知と従者作りと使い魔作り、夜目だけだから試さなくても自然にわかるかな？」

「アイキャンフライ、ヒヤッホーイ」

コウモリになって森に向かって飛んでいった

第三話（後書き）

パクティオーカード決めた理由です

ネクロマンサーで吸血鬼なので生と死に関係するよう選びました

北は五行によると

「従い泉から湧き出て流れる水が元となっていて、これを命の泉と考え、胎内と霊性を兼ね備える性質を表す。」
wikipedia
より引用

正義は作者がノマナが信じる我が道を行ってけると信じて

金・銀はただ単純に神様だからレア行こうぜって感じ

冥王星はどっかに生と死を云々って書いてあったから

チートネクロマンサーは”チート”というのはもともと「ずる、騙す」などの意味なので、ずるして素材だけでネクロマンシーを行える者という意味でチートネクロマンサーです

今回は亜人と会って吸血鬼殺しに行く話。

ポーンアーマーとポーンスパアーは骨がなくても使えるということにノマナは気づいていません。

ネクロマンサーの能力とかは使うときに解説入れようかと思えます

第四話（前書き）

今日はノマナさんの一人称

「やかましい！どけ！」

「ぎゃふん」

はねのけられた、どうやらこの人が下敷きになっただけらしい

ん？人？

「だ、大丈夫ですか？怪我は」

「え？お、おお。精霊の恵みで体が強くなってるからな、大丈夫だ」

「よかつたあ、怪我したらどうしようかと…あれ？ポーション飲ませればよくね？」

「ポーション？あつ、それより貴様か！近頃我らの子を狙った吸血鬼とは！」

「ええ？！俺じゃないつすよいやマジつすよ信じてくださいよ」

「マジ？さつきから変な言葉を使っているがそれは方言か。よそ者め、目にももの見せてやる！」

そう言いながらネコミミをはやした男の人が獣化して襲いかかってくる

「ちよつえええ」

獣化の恩恵か、ブオンブオン風をきる音が最高に怖い。でも吸血鬼のスペックがヤバいのか、

止まって見える。そしてなんだかむかついてきて

右からのパンチ、体を下げて肘を突き上げ、そらす

バキヤア

「ぐおお…いつてえ」

ひるんだところに顔面に思いつきりパンチ、吹き飛んだ獣人の顔を掴んで地面に死なない程度に叩きつける

ドオン

「ぐぶふう」

血を吐いた、ああ、もったいない。なめとこ、フフ。楽しいなあ

「ぐ、ぐぎゅ」

あ、まだ動けるんだでもちようどいい、手加減間違えたらどうしようと思っただけど

吸うなら生き血の…!!

待て、俺今何を考えていた？これが吸血鬼の本能…？

「がさま…ゆ…」

「ってヤバい！ちよつと待って」

一言声をかけてポーチからWC3のポーション・オブ・ヒーリングを出して飲ませる

すると一瞬で鼻血が止まり、変な方向に行った腕が普通の方に動いて治る。

「す、すげ…」

その性能俺が驚いていたら

「くそ、こんな異常なポーションまで使って俺を活かしてどうするつもりだ」

気がついたようだ。だけど一言目がそれか、いや異常なのは俺も思ったが

「いやいやいや、そっちが襲いかかってきたから思わず反撃しちゃうただけだし…ごめんなさい」

「吸血鬼に謝られたくねえよ。それよりお前魔力全く感じられないぞ、吸血鬼ってのは魔力の塊みたいなものだろ？」

「俺はちよつと特殊なんでね。あ、さっき言ってた我らの子を狙った云々ってなんのことだ？俺知らんぞ」

「はあ?!クソ、攻撃しなけりゃよかった。いや、どうせこんなヒョロい奴襲ってもだいじょうぶだってタ力をくくって攻撃するかもしれ…」

小声で言ってるようだがバツチリ聞こえてる。だけど一応こっちに
戻しておこう

「おいどうしたんだ」

「あ、いや、そうだったな。今少し整理するから」

「おう、わか「よし、整理終わった」はやっ」

「要するにお前以外に吸血鬼がいてそいつが俺らの部落にいる子どもを操って子供を拐かしてるんだ」

「なんでわかつたんだ？」

「そりゃあ最初の一人の様子が変だから注意して見たら吸血鬼に噛まれた痕があつたんだよ。ってなに吸血鬼にいつてんだ俺」

「そりゃあ危険なやつだな、どれ、俺が退治してやるっ」

本当は別に目的があるがな。俺のタイプは自分の眷属に理性があつた場合絶対遵守の力、要はルルーシユの”ギアス”ができる。

だが”ギアス”は何も自分の感染させた相手にしかできないわけではない。それは違う人が感染させた者にも一定の条件の元でできる。それは相手を瀕死状態にする事だ。要はそれをこっちの吸血鬼で出来るのか試すのだ

「はぁ？同族殺しとは正気かてめえ！」

「お、おい、何怒ってんだよ」

「はっ、所詮吸血鬼は吸血鬼か、百歩譲って我らの子の血を吸い、卑怯な手で拐かそうとしたのは生きるために仕方なくやってるのかもしれないねえ、だから俺ら獣人の部落の子を標的にしてなければ見逃すさ、だがよりもよって同族殺しとはな。とんでもない種族だ」

む、確かにちよっとゲスい事考えたかもしれないよ？だけどそこま
で言う事な

「じゃあ生きるために犠牲になってくれないかなお二人方」

「！！！！なんだと、その莫大な魔力、真祖か。だがなぜ気づけなかつたんだ」

気づく？あつ、吸血鬼リーダーの存在忘れてた。今度から常時起動しとこ。うわ、スツゲエでっけドラゴンボールで言う”気”が2つとしょっぱいのが1つ。あ、これ俺とあいつとこの獣人が

あれ？今さらだけど獣人っておかしくね？普通最初に合う人は人間って相場決まってるでしょ

てかなんで俺普通に獣人受け入れてるの？さっき人殺そうとしたことになんとも思っていないし

おっかしいーなー

「…24矢！」

「おい、おいってば！アブねえぞ！」

「え？うわ」

6発が縦に4列つて観察してる場合じゃねえ！

その場で飛んで回避、相手が驚いたところでボーン・スピア

「一本か、たいしたことあるまぐう」

「障壁をあつさり突破しただと！」

作者：獣人さん説明おつですこの調子でフォローお願いします

「任された。あれ？」

ボーン・スピアを撃った直後に手を前後に振り、腕を騙狼に変化させて投げつける

やはり障壁があつたか、ボーン・スピア重要だな

「な、なにに？！」

「障壁突破した直後に狼を投げつけるとはえげつない」

「キヤイン」

「く、作戦はよかったがあいにくぎゃあああああああああ」

作者：ほら獣人のお兄さん、地の文地の文

「騙狼はひるんだかのように丸まって飛んでいった所を吸血鬼右手で振り払おうとしたら

突然騙狼が絶妙なタイミングで顔を上げ、口を開けて、腕が開けた

口を通り抜けようとしたときに噛みつく。まさに神業とっていいようなものだ」

「クソ犬がああああ！」

「きゃうん」

「狼を蹴った吸血鬼だが、狼はその前に飛び退いて勢いを殺していた！そして情けない声をだしたのは弱ったふりをして喉笛をかみ切るつもりなのか。ひっ」

「なに、そんな意図があつただなんて」

ちっ、威嚇しちまつたらはい、そうです。って言ってるようなもんだろ。まあいい、騙狼に気を取られてるうちに近づいて

「アデアット」

「なっ」

よし、一発でダガーでたな。ポイズン・ダガーで苦しんどけ。

脊髄に力技で叩き込む。なかなか頑丈だな

「アガア」

そのまま力技で下に引き裂いておこっ

「ギアアアアアアアア」

「シューリョー」

おっと、血がもつたいない。

「んぐ、んぐ、んぐ・・・」

あ、騙狼戻ってきた。

「おい、殺すなよ、でも四肢までならおkだぞ」

「がう」

そして2人(?)で仲良く頂いたとき、

え？獣人？ああ、泡吹いてるね、ちょっと刺激が強かったかな？

第四話（後書き）

精霊の恵み

要は身体強化の魔法、精霊に祝福してもらって強化してるとこの時代の獣人族は考えてるらしい

ポーション・オブ・ヒーリング 150 gold

1瞬でHP250回復する黄色いポーション。ゲームでは各種族御用達の一品

ゲームの下級兵の一撃は10〜20程度なのでかなり回復するはず
戦闘中について

ノマナさんは戦闘に入ると勝つと確信して油断するまで余計な事を考えず戦闘に没頭します。これはまだ吸血鬼になった日が浅く、本能的に引つ張られてるだけです。あとボーン・スピアは骨がなくても使えるけど、本人はそれに気づいていない設定ですが、戦闘中は使える事を本能で知ったという事で脳内補完お願いします

途中悪ふざけ混ぜたのは一人称で表現しきれなかった作者の力不足が事の発端です。ごめんなさい

今回は吸血鬼を手下に獣人くんの部落へレッツラゴーです

第五話（前書き）

おかしい・・・なんで吸血鬼の本能とネクロマンサーの術の一部だ
けでこんなに戦えるんだ・・・ま、いつか

「グ・あ・あ・あ・あ・あ」

「けふ」

血を飲んでいたようだ、口も拭わず、だるまの男の目を見ながら言う

「俺に逆らうな、俺に不利な行動をするな、自殺をするな。返事は」

だるまの男は焦点の合わない目で虚空を見つめている

「ちつさすがにやり過ぎたか。騙狼！もう戻れ」

その声に狼は一瞬名残惜しそうに腕や足を見、隻腕の右腕に変わった

男は右腕を見てもう一度舌打ちをする

「ちつ、血がついてやがる。くそ」

悪態をつきながら手を体に拭きつけ、ポーチに手を突っ込む

そして取り出すのは黄色いグレーターヒーリングポーションだ

その蓋を上と下の歯で蓋の部分を噛み切ると、ダルマの男の口に突っ込んだ

「死ぬなよー」

その効果はすぐく、すぐに手足が少し形になってくる

「もう一本」

またポーチに手を突っ込み、取り出すのは赤いグレーターヒーリン
グポーションだ

これも蓋を噛み切り口に突っ込む

「ぐは、たすかった・・・のか？ハッ、貴様！よくもぬけぬ！？」

手足が治った男は一瞬呆けたあと、自分を持ち上げている男を見て
握りこぶしを作り、振り下ろそうとするが、何故か途中で止めて驚
いた顔をする

「どうした、なぐらないのか」

「貴様ぁ・・・何をした・・・」

「どうしたって言うんだよ」

怪訝そうに持ち上げてる男は言うが、顔はニヤニヤしてる

「まさかこの私に精神干渉系の魔法を！」

「ククク、傑作だなあ真祖の吸血鬼様よおヒヒヒヒ」

ギリリ

持ち上げられている男思わずは齒ぎしりをする。それを見てさらに
嬉しそうな顔で笑う男

俺は必死に気配を隠していた、その時

「ハッ、今の俺完全に最低系！なんて事をしてしまったんだ、いや、こいつの記憶を消せばそんな事…！」

や、やばい、今完全に俺の方向いた、どうしよう、とっさに気絶したふりしたが間に合ったか？

「ま、待ってください、僕は善良な小市民なんです、これは、これはそう！戦闘モードだったんです。普段はもっとおとなしいんです、信じてください！犬の人」

「だあああれが犬じゃあああああああ！」

ふざけんじゃねーぞ！なんでいつもみんな俺のこと犬とか言うんだ！俺の種族は猫人だぞ！

「えっ」

「あ、と、ともかく俺は山猫だ」

「そ、そうですかっていったー」

うわ、あの吸血鬼を手刀で切り落として逃げやがった

「いたいよーいたいー」

なんでこいつ泣いてんだ、いや今はまずあの吸血鬼をしとめ

「逃げんじゃねー！止まりやがれー」

泣きながら手首を腕に押し当てて切れてる。器用だな

「おいおい、そんなこと言っても止まるわけな…は？」

ピタッ

正しくそんな感じであの吸血鬼は動かなくなった。

まさか本当に精神干渉系の魔法を使ったのか？

いやしかし精神干渉は最高等技術だぞ？

詠唱なんて聞いてないぞ、まさかこいつ途轍もなく魔法がうまい？
いやこいつから魔力感じ無い…ん？まさかこいつは自分の魔力を隠してるのか！

なんて事だ、真祖にすら効く最高等魔術を使える上に全く魔力を感じさせない技術、

とんでも無い奴に出会っちゃった。逆らったら命はねえな

「ん？おお、そうだった。もどつてこいよ」

一瞬戸惑った感じがしたがそんなことはないな、未だニヤニヤしてやがる

同族殺しどころじゃない、同族を奴隷にするとはこいつは格が違う、
あ、謝らないと…

「さっきは言い過ぎた、すまない。」

「あん？なんのことだ」

「あ、ああ、同族殺しとかなんとか…」

「ああ、気にしてないからいいぞ。そういえば自己紹介はまだだっ

たな、俺はノマナ、ノマナ・アンデッドだ」

「アンデッド?! いや、すまない。私は雷の精を禱る部落の戦士の一人、カーネギーだ」

「よろしくな、カーネギー。で、お前の名前は」

「名前などこの体になってから捨てたわ」

「ふーん、じゃあお前はデイーイー・ド・アンデッドって名乗ってけ」

「ぐ、仰せのままに」

「しかしすごいなノマナ、真祖に精神干渉できるなんて」

その言葉にノマナは少し考えた顔をした。教えようか迷ってるのだろうか

「これは俺独自の魔法で吸血鬼にしか使えない。あと基本極端に弱らせないといけないから結構使いかたが悪い。基今回はじめてだったんだよ」

「なっ、はじめてで使った相手が真祖とはお前命知らずだな」

その言葉にさすがの俺も驚いてしまった

「まあ俺も最初に会った奴が真祖だと思わなくてな。てか弱かったよな」

号の眷属だ。血は気が向いたらまたやるよ」

「何だこの力は・・・体が侵食されてるようだ・・・だが不快じゃない・・・不思議だ・・・」

「まあ俺の眷属として働いてもらおう。ところでカーネギー」

「な、なんだよ。眷属になるつもり殺られるつもりもはさらさらないぞ」

精霊の恵を無詠唱で発動しておく、ばれてないだろうな

「まあそれはいいよ。なんで弓を持ってんだ？」

「ああ、これは魔法の媒体でな、実演してやるから見てろ」

「おい、貴様そう言いながらなぜ私に弓を向ける!」

「細かいことはきにすんな。ジリアンヌ・プラクティヌ・セリアン
又 雷の精霊十三柱 集い来りて 敵を貫く 雷の矢となれ 収束・
雷の弓矢」

「おい殺すなよ」

「ほお、弓に魔法の矢をつがえて撃つと威力が上がるとは、興味深くがががががああ」

「あーやっぱこれ人に撃つと気分いいな」

「おい、ディー！大丈夫か！」

「吸血鬼の回復力があれば大丈夫だ。あと威力を強くして細くしたから多分貫通してる。だから刺さって電気ショックが続く事もないはずだし」

「貴様ああああ・・・」

「おお、怖い怖い」

「ほおほお、カーネギー、お前らの部落の魔法は面白そうだな。全部こいつに教える」

「い、いやそれはちょっと勘弁して欲しいかなあ…なんて」

愛想笑いをして少しこしお落とす、バレてないよな？

「まあ逃げるなよ、聞いたほうがいいぞ。」

くそ、バレてる、一応聞いとくか？

「実はだな、俺はオリジナルの魔法がある。

俺はネクロマンシーと名付けてるんだが、死体を使う事によって最大限に発揮されるんだ。

何が言いたいかというと死者を蘇生させて自分の思い通りに命令を執行させる術があるんだよ。

実験の結果新鮮な死体が必要なんだが人間なら頭を破壊しない限り知ってる事全部

教えてくれるんだぜ。つまりお前を殺して部落について聞き出せばいい。

おっと待ったほうがいいぞ。逃げてこの後の話を聞かないと死ぬほ

ど後悔するぞ。

残念な事に蘇生した肉体は3分経つと爆発するんだよ。だから俺は死体を爆弾にする術を作った。そんでな？今度は死体から骨だけ取り出して軍隊を作れる魔法をつくったんだ。

今度は大成功だったよ。つまり何が言いたいかというと、俺は死体をつくって骨の軍を作る。だけどそれじゃあ時間がかかるだろうね。だから君が逃げた瞬間森を燃やして散策してみようと思うんだ。きつと焼死体がいっぱいあるだろうね。そうすれば僕は軍を作れて君が魔法を教えなかったせいでこの森は失われるんだがどうだろうか」

「わかりました」

逃げなくてよかった

第五話（後書き）

あ：ありのまま書いてた時の事を話すぜ！

「俺はごく普通なオリ主を書いてると思っただけだ。いつの間にか最低系を書いてた」

な：何を言っただこの作者 と思うかもしれんが
おれも何を書いてたのかわらんかった

もう書きなおそうかと思っただけだめんどくさかった

最低系とか悪役とかそんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ
もつと恐ろしい吸血鬼の本能を感じたぜ

結論：吸血鬼の本能が悪い、作者とノマナは悪くない

ノマナくんが悪の吸血鬼的思考を初めてるけど個人的にはじょじょにまともになってくれればいいと思ってます。焦りは禁物です

赤いポーションはDiabloのポーション

黄色いポーションは前回出したヒーリングポーションの倍の効果（WC3）

黄色い方は一瞬で回復させるから死なないように、その後の赤いポーションは回復はするがそこそこ時間かかるがクールダウン無視して使えるから黄色い方の重ね掛け

デューイー・ドゥ 第一的中国語読み

用は第一のアンデッド

次回部落に行つて魔法ゲッツの巻

第六話（前書き）

とりあえず救済策を入れてみます

第六話

side - ノマナ

「じゃあとりあえず最初に言つとくが、俺が使える魔法は2つしかない！」

「威張つて言えることじゃないだろ」

「いや、二つだけで吸血鬼狩りにくるとは思えん」

「そりゃそうだ。俺はただの偵察だからな」

「だとよ、どう思う、ディー」

「こいつの言ってることはハツタリだ、2つしかないとは言え見た所相当の熟練度だな。しかも普通の強化魔術と違いこいつのひたす足の速さに特化してるようだ」

「所見でバレるとは思わんかったよ吸血鬼くん」

「調子に乗るな！俺が手を出せないのはノマナだけでお前は別だぞ！」

「じゃあ最低でも魔法を全部教えてもらつてからかこいつが逃げ出すかのどつちかの条件を満たすまで危害を加えるな」

「クソつたれ！」

「ホント便利だなお前の目」

「……………」

言われてみれば目を見て話さいといけないな。これも魔眼の一種か？

「だんまりか、まあいいよ。ネタバレすると俺が使ったのは精霊の恵。呪文は始動キーなしで一回しか言わないからよく聞いとけよ。来たれ雷精 集え雷精 我が足に宿り 力を与えたまえ 雷精の恵 使い方によつて効果も変わってくる。俺はもつぱら魔力を通した状態でいかに早く、効率よく早く走れるか改造してる。俺の得意属性が雷だからこそできる技だし、これが本来の術式で俺のは俺のに特化してるから見せなくてもいいよな」

「どうせ他人に教えず稀少価値を高めてるんであるのに」

「…そんなことはない」

「いいから教える、俺は”全部”って言ったはずだぞ」

「鬼め…」

「吸血鬼だが？」

「もついい」

それだけ言つてまた変な図を書き始めた。よくみると少し違つ、何が違つという丸い円の中に書いてある”字”の様な物が違つ

「ほお…ノマナ、お前この字を読めるか？」

こいつ実は俺に殺されかけたこと忘れてるだろ。ソッチの方が都合いいけど

「読めね」

「ふふーん、俺は読めるぞ」

「なにを言って」「すっげー、どうして分かるの？おしえてー」「…おい」

あの鼻の穴の膨らみ具合からしてここは煽るとポロツと言ってしま
うパターンのはず。邪魔すんなディー

「ふふふーん、どーしてもっていうんなら仕方ないんだが…」チラッ
腕を組みながら目をつぶって片目だけチラチラ開けてみてる。ウ
ゼエ

「貴様…言う事は「どーしても教えてほしー！かつこ良くて優しく
て吸血鬼にも負けないカーネギー先生ならきつと教えてくれるよね
ー信じてるもん」もう何もいわん…」

「実はだな、俺も詳しくは知らんがルーンという10部落特有の魔
法文字を使ってるんだ」

「そーなのかー」

「そのルーンって物はな、魔法を強化したり方向性を決めて改良し
たりする以外にも魔道具を作るのにも適しているんだ」

「そーなのかー」

「これは俺も初歩的なことを知ってるから教えてやろう。まず字を掘って、指先にひたすら魔力を貯めて指を切って、その血で掘った部分をなぞるとできる」

「そーなのかー」

あら、ちよつと眉寄ってるな、そーなのかーしか言わないのに違和感感じたか？

「それでー？その効果はいかほど」

「ああ、それは絶大だぞ。この弓もたった3文字で魔法の矢を耐えられる耐久度と威力上昇が両方出来てるんだ」

「その魔法の矢って気になってたんだけどなんか似たような魔法なかった？」

「魔法の射手のことが」

「そうそう、それはどう違うの？」

「これは各部落によって違うんだが普通の魔法の射手はこれで」

そう言ってさっきよりは簡単そうな絵を書く、さすが基礎の基礎

「それでこっちが各部落によって変わるけどこんなもんだ」

そして書かれた物は、やはり先ほど見た円と似てる変な文字のよう
な物が書かれてる

「ウチは雷の精霊を禱ってるから雷の矢になる」

「10部落つて言つてたけど雷以外に何があるの？」

「よくぞ聞いてくれました、雷以外には光・闇・火・治・砂・水・
花・風・氷の9種類がいて、光・闇・火・雷・治には地獣人が多く
て砂・水・花・風・氷が空獣人が多いんだよ。どうだ、不思議だろ
？」

「ええ、とつても。有意義な時間でしたよカーネギー。」

「どういたし「ボーンスピーア」な…んで…？」

「お前さんはもう用なしだしね、復活させて村の場所その他もろも
ろ吐いてもらおうし」

「ぎ・ぎあ・まあ…！」

side - good

「ど、ど、ど、どうしましょう、吸血鬼の本能に飲まれてるのか知
りませんが慈悲のかけらもありませんよ？あのままだと恨まれすぎ
て私に変な力が流れて来るかもだし、それでそれで…」

「邪神になる、と言いたいのかね」

「そう！それですよ！どうしてくれるんですか！世界を作ってくれ

る。たつて邪神の恐怖政治の世界なんて嫌ですよ、私邪神じゃないし」

「まあまあ落ち着かんかね、どうじゃ、こっそり慈悲の心でもいれてやれば収まるんじゃなかるうか」

「そうですね、私ももう少し落ち着くべきでした。今度から生物を殺すのに罪悪感を感じる程度には…」

「それだと何も食えんじやろう、食べ物以外の生物には優しくする程度でいいんじやよ。何事も限度は必要じゃよ、ましては相手は”元”がつくとは言え吸血鬼になって間もない。なまじに肉の味を覚えてるからこそ食えないのはつらかるう」

「じゃあ肉を食べた記憶を消せばいいじゃないですか」

「それも一つの手段じやろうがそれでは後々あ奴が苦勞するだらう」

「なぜですか？」

「考えてみる、将来奴が周りが肉食べてるのにひとりだけでもそそと野菜や果物のみ食べていたとする。しかも肉を食べると罪悪感があるだけで食えない訳ではない、それじゃあ周りも納得せんじやろうに。いささかかわいそうではないかのう」

「…一理ありますね」

「なんじゃ、お前の世界では肉は存在せんのか？」

「えっ、それは…」

「まあそうしたいなら止めはせんど。おーそどつくすな奴じゃなくいきなり難易度の高い方を選ぶとは、どうなるかわしも楽しみじやよ。ホホホ」

「つぎぎ…わかりました！わかりましたよ、もう」

「素直でよろしい」

こうしてノマナは吸血鬼の本能に食料以外の生物に対する優しさが生まれました

side - ノマナ

クソ、なんでこんなに罪悪感があるんだよ、いいじゃねえか、別に殺したつて。さっきまで罪悪感なんてなかったんだし。でもこいつ親切にいろいろ教えてくれたよな…このまま殺すのか俺は…いやだ！そんなのは嫌だ！

俺はポーチに手を突っ込み、出すのは紫色で大きいポーション。一瞬で全回復する別名若返りの薬。それをカーネギーの口に垂らしこんでいく

「あれ、なんで俺を助けた」

「気まぐれだ」

「そつ…か？」

「世話になった、じゃあな」

「あ、ああ、もう二度と会いたくねえけどな」

「俺もだよカーネギー。デイー、付いてこい」

「チッ、仰せのままに」

第六話（後書き）

主人公は別に女顔とか童顔ってわけではないです。

ではなぜカーネギーがペラペラしゃべってくれたかというと、命の危険がひとまず去ってほっとして油断した時に、プライドの塊の吸血鬼が自分の無能を認めたので、優越感に浸って調子に乗ったところを主人公が煽ったら乗ってしまったと考えるてください。ご都合主義ですね、ごめんなさい

あと全回復ポジションは完全に存在を忘れてました

カーネギーはルーンに興味を示してます。デイーはカーネギーが見せた術式と呪文は覚えてる設定です。天才ってことにしといてください。裏設定では代々続く研究を完成させて自分で自分を吸血鬼化させたので。

第七話（前書き）

豚もおだてりゃ木に登る、釣られて書いた

第七話

カーネギーと別れて歩き始めるが、すぐにやることがない事に気づいた。

とりあえず人里に行こうと思ってもどこにあるのかもわからない、どうしたものか…

「おい、デー」

「なんだい」

「人里へ案内してくれないか？」

「なぜだ？」

「いいから教えろ」

「貴様、なぜ先ほどの獣人を逃がした、縛り上げて情報でも収集しておけばよかるうに」

「クツ、忘れてたんだよ！」

「おや、敬愛なるご・しゅ・じ・ん・さ・ま、私はてっきり！どこか目標地があると思っておりますが、まさか考えなしの阿呆だったとは…ククク」

「死！アブね、やめていいというまで自分を傷めつけとけ」

思わず肩をつかみ、目を合わせ死ねといいそうになるが、寸前で止

めることに成功。代わりに自分の意思に反しておもいつきり自分を殴るといふ恐怖を与えることにする。

生前に自分で自分をおもいつきり殴るとかめっちゃ怖いって聞いたからどうなるか知りたかったわけじゃないぞ？ほんとだぞ？

「はぁ?! つてくそ、やめっさいブッ」

片手で顔面殴り始めた…もう方方の手で金玉を

キユッ

「も、もうやめていいぞ…」

「あ・ああ・・・」

所詮こいつも男か、いや、これは俺に言うセリフだな、この痛みを知らなければこのまま続けさせてたかもしれないが…とにかく何かいい手はないか…

「・・・そうだ! 探知すれば良いのか!」

「あつう・・・」

「おい、付いてこい」

「ぎ、ぎぞまあ・・・いつか絶対こるす・・・」

口ではそう言っても体は正直だぜゲフンゲフン。え? 咳が遅い? いいんだよそんなモン

「探知探知つと」

近くにてっかい気？的なものが2つ以外には、ない・・・だと・・・

くそ、なんて事だ！このまま彷徨うしか…あれ？さまよってれば人里見つかんじゃね？

あ、万が一動物見つけてもぶっ殺してスケルトンにして探させるのもありだな。それで行こう

King Crimson そして時は2日後

へ、へへ、やっと見つけたぜ…殺した小動物をスケルトンにすると肉の部分が爆散して食えなくなると知ったときは超ビビったが、ついに気の群れを見つけた…

「貴様…いつになったらまともな飯にありつけるのだ」

「お前が肉を独り占めしたのが悪い、自己自得だ」

そう、こいつはあるうことが二匹目の動物、まあうさぎだが、それを殺して捌いて”ご主人様”である俺のために火の魔法で調理してたと思ったらあるうことが全部食いやがった。

それから俺はこいつに骨しか与えてない。ザマア

「それより落ち着け、生き物が多いところ見つけたぞ」

「人里であるをお願いしたいものだが、我らは一文無しだぞ」

「略だゲフンゲフン、失礼、拝借もしくは分け与えてもらえばいいだろ」

「む、たしかに一理あるな。では早く行こうぞ」

「慌てるな慌てるな、逃げられたらどうする。こういう時はスケルトンを向かい側に行かせてハサミ打ちにしてパニックになったところを足を撃ちぬいて動けなくすればいい」

「貴様という奴は…うすうす気づいていたがとてつもない外道だな」

「なんだと！また自分で玉潰したいか」

そう言つとディーイーは顔を青ざめる

「わるかった、このとおりだ」

「じゃあお前はそのまままっすぐな、俺は場所をお前に合わせて調整しておく」

「承知した」

そして全力疾走、生前の俺ならへばっていたがこの体ならヘッチャラだぜ

「よし、ここかな、やっぱりめんどくさいから走らせてディーの所まで誘導するか？」

うん、どうせ逃げて俺の足なら追いつく…かもしれないからいいな、そうしよう

そう考えて、別行動のスケルトンに指示を出す。ビビビ

本当に通じた。もう少しペース上げるかね

あ、スケルトン着いたな。けど何だ？なんで逃げないんだ？

まあ着けばわかるか。

お、みえてk・・・「なんで人形は人形でもスケルトンとかゾンビやー！」

思わずライダードロップキック（実在するかしらんけど）決め手ゾンビの頭をグシャしちゃった

「ふう、ふう、この怒り、収まん。とりあえずアデアット、コープス・エクスプロージョン」

ゾンビの死体を爆発させた

「もう技の経験値集めでもするかね」

「なんだ！爆発音がしたぞってこいつら不死族ではないか！何が生き物だ！こいつらは別だ！」

「知つとるわポケエ！ええい！ボーンスパアボーンスパアボーンスパア…」

「お、きさ、うわった」

「すーふう、すーふう、よし、落ち着いた。いざふしぞく？狩りへまいらん！」

「貴様！障壁突破を10数発売っていうことはそれだけか！」

「ああん？ここで俺より多く殺せたらこれから肉は割り勘していいぞ」

「よし、すぐ殺る」

「おー頑張れ」

フッフ、俺がそう素直に渡すと思ったか、もしリードされそうになったらお前が殺した奴をコープス・エクスペロージョンしてやる

「ラ マギア パーソン マータ 来たれ雷精 集え雷精 我が足に宿り 力を与えたまえ 雷精の恵」

「えっ、それ使っちゃう？」

「ふむ、ちゃんと使えるようだな……。悪いが我は腹が減っていてな！機嫌が悪いのだよ！ラ マギア パーソン マータ 来たれ雷精 集え雷精 空に集い 神罰を騙れ それは数の暴力 そして神の雷 我に仇なす者に 災いあれ 落雷連撃」

ピカッ

ドカーン

うーわー（俺が突っ込んだ先にいきなり雷落ちてきてバックステッ
プしたら跳び過ぎた）

ぐるぐるぐる

シーン

「

「ふう、久々につか「ふざけんじゃねええええええぞおおおお
おおおお」「おおおおつづぶ」

デイーを揺さぶる

「よ、よせ……吐く……」

「勝手に吐いてるよクソやろう！御主人様殺す気かこのやろう！」
でも吐かれるのは嫌だから地面にめいいっばい叩きつけた

グチヨ

何も聞こえなかった。

「く、いい加減貴様の暴力に耐えんな……」

グシヤ

「聞こえてんぞ」

頭を踏んづけてやった

「ぐ、容赦がないことで……それよりこれで勝負は我の勝ちだな」
くそ、こいつのドヤって顔してるのがむかつくぜ、一発殴っとこ。
あ、避けられた。平常心平常心ヒッヒフー

「おーけー、わかった俺の負けだ、食べ物さが…!!」

「どうした」

「俺の感知範囲内に10数何かがこちらに向かっているのが引っかけた」

「気配を感じたのか…？ 返り討ちにするか」

「先行詠唱できるか？」

「それを言うなら遅延呪文だろ。あれはかなりの高等技術だぞ、私でも魔法の射手が精一杯だ」

「じゃあそれやっつけ、このペースならあと10分で着くだろ」

「わかった」

King Crimson 二人は10分間茂みに隠れて様子を伺うことにした

「なんだこれは…」

「消し炭になってるわね…」

「おい、よく見ろ、これ骨だぞ」

「ほんとだにゃ、不死族がやったのかにゃ？ 匂いはどうかにゃ、わんこ」

「わんこ言うなニヤンコ。不死族の匂いは焦げた匂いのせいかそこ
まで残ってない。」

「使えにやいやつめ」

「うるさい、そのかわりアデアット！そこに二人ほどいるぞ！」

「アデアットにや！」

「アデアット！」

「アデアット！」

「アデアット！」

「アデアット！」

遅延呪文の射手がちょうど30発飛んで行ったが、犬っぽいやつがいきなり大剣をだして振り回す。それに少し遅れて猫っぽいやつと数人が武器を取り出し

「………魔法の射手 連弾 過治療の6矢！」

40本あまりの矢が飛んできて、十数発が相殺せず飛んでくる

勝てない事はないが、せつかくの情報源を逃がす気はさらさらないぞ。なににせよここは和解せねばならない

「ワー待て待て、違うんだ、誤解だ！」

「なんだこの矢は…それに過治療の矢？やはりここに来て眷属にされた以外は正解だったな」ブツブツ

取り合えず二人とも茂みから飛び出す

チラッと茂みを見ると

「なんだこれ?!」

植物が全部枯れ死してた

「なるほど・・・」

向こうは油断無く構えながらこそそこそと喋ってる。あいにく俺のナイスな吸血鬼の耳はそれを聞き逃さない

「おい、わんころ、こいつらはどうだ」

「ワンコロ言うなニヤンころ、こいつらは不死族の匂いするが普通のと微妙に違う。見たところそれなりの知能も持っているし片方の魔力は莫大だ。とりあえずかなり上位扱いぞ」

「話を聴くべきか？」

「刺激しないほうがいい、話半分に聞いて増援を要請する。畏かもしれないから気をつける」

「了解」(複数)

あのわんこがリーダー格かー、いや、マジでどうしよう、信用され

てないんだが。いや、不死族ってアンデッドのことだよな…俺らが
アンデッドと敵対してるといったら信じてくれるだろうか、いや、
ないよな…ご都合主義ー来てくれー

第七話（後書き）

どう考えても最初の善良さがなくなり始めてる。おかしいなあ、僕の主人公が外道なわけがないのに。あと俺の頭が悪くなってるのか主人公の思考にアホなのが混ざってる気がしたけど気のせいだZ E !

あとラ マギア パーソン マータはエキサイト翻訳で死者の魔力をスペイン語に翻訳した物を適当に日本語に変えたものです

第八話（前書き）

ご都合主義なんてやりたくない気もするけど楽だからやる
あとずっと書いてなかったから書き方変わっても許してちょ

第八話

side - ヴァンパイアナイト

ロードアネセロン様によると莫大な魔力によって我軍の斥候が消されたようだ。

瘡だが餌の成り損ない共は厄介だ、下等兵のスケルトンやゾンビ共で足止めして

主力揃えるつもりだったがこの実力レベルは今のうちに削れば大きい。

少なくとも力を見極めないといけない。だから幹部の俺が呼ばれたわけだ。

「だとしてもなんでお前らまで来るんだ」

「ロードアネセロン様のご命令だ、逆らうわけにいかん」

「「そっだ」「」

そう、俺はこのいけ好かない野郎ども、まあ同期と先輩がついてくるのが不満なんだ。俺一人でできるといふのに

「くそ、勝手にしろ」

「口を慎め」

「・・・わかった」

くそ、戦闘中にスキ見てぶっ殺してやるうか。

「いたぞ」

戦闘開始か

side・ノマナ

「あ」

4人近づいてくる。全員かなりの”力”を持ってそうだ

「!?!」

てかこいつら反応が露骨だな

「あー」

「気をつけろ、油断させる気かもしれない」

「キャ」

ドガン

頭を割られた

と思っただけど避けてた。危ない危ない

「チ、思ったより出来る」

「救援だ」

「え」

「なんだとっ」

「む、貴様ら所属を言え、それとも我軍に降りよつと考える野良の吸血鬼か？」

4人が木の上から聞いてくる

「ノマナニアンデッドといひます。ですが今どちらについつか迷っています」

「私はザ…ぐ、ディーイー・ド・アンデッドだ」

「ディーイー・ド・アンデッド？おかしな名前だな」

「それよりそつちの魔力なし…本当に吸血鬼か？」

「この雑魚はどうでもいひだろ、ディーイーとかいう奴以外まとめやっちまおっぜ」

「そつだ「ボーンスパア」な…？」

今やっちまうつて言つたし

「いまのむかついたーからーやっちまうかー（棒）」

にやけながら言つ。

ちなみにポーンスパアは心臓を貫いたは…

「てめえ…もう少しで死ぬところだったダローがー！」

「げ」

「お手並み拝見だな、ご主人。ククク」

「趣味ワリーぞディー」

「なに、死んでくれれば呪縛が解けずとも解析していけばよかるっ」

「だそーでー！おらよ！」

右手を大きく振りかぶって殴りかかってくる

ばかめ、相手を懐に入れるような

「ぐはあ」

左手も時間差で腹パンしてきていた。モロに食らって背中をぐーで殴られる。

「おいおいおい、あんまがっかりさせんなよー、後ろの早く撃つてとどめ刺しちまえ」

「そつだな」

闇よ

突然地面が黒ずみ、沼のように体が沈む

「ま、まさかその魔法は」

「ほう、博識だな。短縮魔法の究極形とも言える物だ。お前も我らが軍に加わり、才能があればロードアネセロン様が与えてくださるぞ」

「魅力的な誘いだな。」

「だろ？」

俺はそれらを聞き流し、ポーチを取り出して範囲外に投げる。そして上半身をコウモリに変えてポーチのところに行き、上半身だけ体を作り、中からとにかくでかい赤ポーションを取り出し、飲む。

「ほう？」

「なんだあいつ、魔力なしであんなことできるのか」

「あいにく様私のご主人はあのような化物なのでね、倒してくれたら考えてもいい」

「了解した。全員で行くぞ」

「あいよ」

「了解」

「アイアンメイデン×3アンプリファイ・ダメージ」

「何ブツブツ言ってるんだ、よ！」

そしてさっき仕留め損なつたやつが突っ込んできたところで

「デイルム・ビジョン！」

「なっ」

視界がいきなり暗くなつたのに戸惑つた所にクロスカウンターをぶち込む

「「「闇よ」「」」

四面八方から闇の矢が飛んで来る。

それをあえて受けてみた

「ぐあああああああああああああ」

「うほ」

一人血を吐きながら木から落ち

「ぐう」

「なるほど、さっきブツブツ言つてたのも食らつたのもこれのためか」

二人はどうにか耐えた。ただ一人は膝がガクガクになり、一人は平

然に見えるがやせ我慢のようだ

「お生憎さま、俺は雑魚じゃないんでね。アデアット」

ダガーに変え、落ちた奴に突っ込む

「闇よ！」

あと一步で殺せる所で足元が闇に飲まれ、落ちてた奴は消えた。影の転移魔法か

「しね」

「ボーンスピーア」

センサーは付いているから戻ってきてる所を当然のごとく察知し、心臓に撃つ。今度こそ当てる。という過去の距離はあたってもらわないと困る

「ってね」

砂になる音が聞こえる

「ここは一旦引くぞ」

「闇よ」

二人は転移してどっかに行ってしまったとさ

これで安心かなと思って獣人たちの方を振り返ると

「奴らはとっくに退避したぞ」

なんてこったい

第八話（後書き）

結果

ご都合主義にはならなかった。獣人の人たちがいてくれればよかったのに

最初の視点のヴァンパイアナイト

幹部は盛ってます

実質中隊長以上ぐらいですのでかなり強い方。雑魚い（一般的な）亜人兵なら4人までなら互角に戦って体力勝ち出来る程度。得意は近接戦闘と複数相手の足止め。もっとも今回は全くできてなかったけど

ラテン語は調べたけど断念した。翻訳サイト見つからないし

x3つてのは三回言ったってこと

第九話

「まあとりあえず感知範囲内に入って…って範囲から出そう！」

「聞こうと思っていたがなんだその感知範囲とは」

「まあ用は力が強い奴がわかるんだよ。数キロぐらい」

「キロ？」

「まあいい、お前、新しく覚えた魔法使って俺を背負って指定した方向へ追え」

「なんで俺が…」

「まあいいだろ、オーラ使ってやるから」

「オーラ？」

「あーもう範囲から抜けちまった、早くしろ、走りながら言っ」

「く、わかった」

「エンデュランスオーラ、アンホーリーオーラ」

すると足元から魔方陣のような光が2つ重なって出る

「む、突然体が軽くなったぞ」

「そりゃそうだ、これは合わせて移動速度1・6倍と回復及び攻撃速度追加だからな」

「なんだそれは！いや、お前はバグだったな」

「お前が言うなお前が。あえて言うなら俺はバグじゃなくてチートだな」

「チート？ずるって意味だったが。」

「まあ文字通りあるきっかけでこういうずるができる様になったんだよ。」

「羨ましい…」

「まあともかく今のがオーラってやつだ」

「なるほど・・・興味深いな」

それより追いついたらどうする…だ。とりあえずあの同族共とは敵対してしまった、だがあの口ぶりからすれば組織の可能性はある。ひたすら呪文を唱えても喉が潰れるし、数で来られたらスケルトン大量に揃えるしか対抗できない。当然相手のほうが地力が高い可能性が高いからきつい。ならこちらも後ろ盾があればいい。つまり

「ほれほれ、あと少しだぞ」

「む、もうか」

「ん？この匂いは…」

「どうしたわんころ」

猫の顔をした人型は言う

「ワンコロ言うなにゃんころ、どうやらさっきの奴らだ、追いかけてきた。」

「どうするんだ」

犬の顔をした人形が同じく白い犬の顔をした人形に聞く

「どのみちあのレベルは勝てない、出来れば話し合いで済ませたいが、迎撃も考えたほうがいい…」

「……………了解」

……………

む、追いついた

「で、貴様はどうするんだ」

「もちろんぶちのめしてから話を聞く…」

あれ、なんでぶちのめす前提なんだ？

「ことは最終手段としてとっておくとして、話しかけてみる」

「ふん、勝手にしろ」

そっけないように見えてちょっと期待してる顔？何に期待して…なるほど、新しい魔法系列か

「はいはい。おーい！」

武器はしまつてないな。まああたりまえだけど

「なんだ」

「お前が代表でいいかな」

「そうだ」

答えたのは白い犬人間だった

最低限の言葉で余計な事言わないようにしてるのかな？まあいいや

「単刀直入に言うが、お前らアイツらと仲間か？」

「仲間な訳ないだろ！」

釣れた。カーネギーが言うには子供をさらってるらしいとえ違う部落としても何らかの関係にあると（いいなあ…と）考えてたけど

「奴らはおいら達のなか「やめるザンク…ザンクパ！」え、おいらは「だから黙ってる！」う…」

ラッキー、これで敵対関係の可能性がほぼ確定した。

「じゃあ、敵対関係にあるんだな」

「・・・」

「どうだ、俺らと同盟を組まないか」

「同盟？」

「不可侵、場合によっては交渉や互いに救援を送る関係…とか」

「信用できんな」

「なら信用できる物がないか？俺はヒーリングポジションを大量に持つてるし、信じるなら初回限定で分け与えてもいいが」

「ほんとなんだな！リーダー、一応試しましょう！」

「おい、にやに勝手なこと言って」「いや、ここは試してみる」「にやに？！」「」

「ありが」ただし、いつでも殺せるようにだっ！」「っ」

かろうじて迎撃を我慢し、避けるのも我慢。ここは信頼を試され

ザシユ

「げっ」

急いで飛び退く

「チ」

ビキッ

こいつっ！

「アデアットぶっころし…フウ」

危うく某兄貴の言うてた事を実行してしまうところだった

武器をダガーに変えて、首に当てる。毒で毛の先っぽが溶けてるけど気にしない。

遅れて武器持ちの部下が襲いかかってくる。横目でディーを見たら笑ってた。クソが

「く、なぜ殺さん」

「いやー、お前の部下の武器があたってたなあ」

「お前が俺を殺して引くまで余裕すぎるほどの間があったぞ」

「まあここは寛大に許してやることにしたんだよ。」

「俺らでないといけない理由があるよ…」

じじじはん…

「図に乗るなよお？俺らはいざとなれば別世界に行けるんだよ…ただラクしたいからこうしてるってのに気づけてんだよ」

「ふん」

「まあいい、この話に乗るか？乗らないか。」

「乗るしかないんだろう？だが俺だけでは無理だ」

「わかってるつもりだ。乗らなくてもお前の命一つでほかは助けてやるよ」

なめられたら終わりだしな。

「わかった」

「というわけで皆さん、あなた方は私を即死させる自信はありますか？もしできたとしても仲間の彼がいます。あなた方ではきつと対抗できないでしょう。ですが、ここで話に乗らなくてもポーシヨンに関する取引は受けましょう。」

「乗った！」

「おい、ザンクン！」

あーさっきの偽名だったのか。こいつはすまし顔してるけど

「だってそうだろ？スパイだとしてもあれを使えば破れない」

「あれを使うには長老を呼ばないといけないぞ」

「それでも彼女が死にかけてるんだぞ！それなのに今は延命処置しかできない！何が治癒の精だ！彼女を救えないなんて」

あ、殴った

「ザンクン！言い過ぎだぞ！それにいまは技術が足りないだけだ！魔力でゴリ押しで……」

ん、なんでこつち見る……って後ろのディーの方が

「あの、もしポーションが効かなくても術を教えるので部落の人々をたすけてくれませんか？」

「なんで私がそんな事を……」

「頼みます、できることならなんでもします！」

笑みが出てるぞバカ

「じゃあお前らの部落のルーンを教える」

「そんな」

「まて」

ザンクン（ほぼ確定）をとりの黒猫の人型が引き寄せてなんか言った。

「わかりました。ですが我らが部落でしか使えないとされる物でも

いいですか？」

「ほう、興味深い。わかったぞ」

「ありがとうございます」

「交渉成立だな」

押さえつけてるわんこの人型ににやって笑ってやる

あ、顔逸らした

第九話（後書き）

はい、やっと部落に入れます。落ち着いた

第十話（前書き）

話の内容忘れ気味なので口調変でも勘弁して下さい。

とりあえず神様の依頼を終わらせるところまでやっておきます。

その後の原作はめんどゲフン

おほん

ヤル気が出たらやります。平均で週一で更新するつもり

第十話

「お前らはそこにいるじゃ！」

「はいよ」

さて、奴らが入った間にポーションを揃えておくか。通販みたいに行かないかな

「おいディー、俺がポーションの効果を言ったらすごい！とか言うてくれ」

「なぜだ」

「そりゃあお前大魔法使いだろ？」

「ん？ま、まあな」

顔赤いぞーククク

「何をにやけている」

「いやいや、それでその大魔法使いも絶賛のサイキョーなポーションを見せつければ相手も信用が上がるだろ」

「それもそうだがそれ以上にほんとうに効果が有るのか」

「あるよー」

ニヤリと笑ってみせる。おっと眉をひそめちゃった

「まあいいや、教えてやろう。これが赤ポーションシリーズでこれが青ポーションシリーズ。そしてこれが一瞬で回復最強の黄色回復シリーズ。」

「どっちがうんだ」

「赤と青はちよびつとのと少なめと普通のと多めと多いの5つの段階があつて一瞬ではなく段階的に超回復していく。ちなみに重複使用可能ね」

「なるほど」

「ちなみに青は魔力を回復させます」

「なんだそれは！」

「まあまあ落ち着いて、黄色はさっき言ったとおり一瞬で傷が治る。ただし回復が安定するまでの間は重ね飲みはできない。」

「なるほど、確かにそれはすごいというよりも驚愕的だ。特に魔力の方は。」

「お前は吸血鬼だから必要ないと思ってるかもしれないが体力回復ポーションもすげーんだぞ。しかもこれ！」

取り出すのはブクブクした赤い液体が入って雰囲氣的にも赤い物が出てるように見える三角フラスコ

「な、なんだこれは・・・」

「神の加護なんかで無敵になれんだぜ?!俺の最強のポーションだぞ!無敵ポーションと名付けてる」

「それはそれッ」

シュッ

素早く赤ポーションにすり替える

パリーン

「これで無敵ポーションとやらはなくなったな」

「ところがどっこい!もう一本あります!」

そう言ってさっきしまった物を取り出す。それをディイーは覚めた目で見てくる

「き、きさまー!」

「まあ使うつもりはないから安心してね」

てか割れたらどうすんだよ、これWC3系列で次の入荷に1日かかるんだぞ

「な、な・・・」

「ところで早かったな、どうしたんだ」

「どうしたもこうしたもない、くるんだ」

「なんだよなあ」

「そうだな。」

King Crimson

「こちらです」

歳を取った犬っぽい奴が言う

「長老！なぜこんな奴を！」

その隣にテンプレかよと思わず思ってしまうかのように反論する若い

「奴は歳をとった匂いがしない、それなのに強大力を持つ百年物の吸血鬼を従えてるので、奴らの手口から考えれば強引に勧誘するか殺しに来るに決まっとう。現にアイツらの血の匂いがするわ。おそらく誘いを蹴ってきたのじゃろう」

「おお、」名答

「ご名答はいいのだが貴様、私を物扱いしたな」

そう言いながらディーは魔法の矢を作り出す

「アデアット」

かさばらない様に指輪にしていた道具を杖に変えて全て叩き落とす

「貴様……」

バジユン

ハイキックしながらもう片手で杖を使って思いっきり頭を殴る

吸血鬼の身体能力ばねーわ

この無理矢理にやった行動も成功し、見事にディーの頭がトマトが潰れたようになった

「あ、あわわ……」

若いのちびってるし

「ほう、どつするつもりじゃ？」

ジジイの方は目を細める

「ちょうどいいでしょう。本来飲み薬ですが、こいつならかけても治りそうなのでやってみますね」

ジャバジャバ

すると逆再生みたいに頭が復元されていく

「おええ……」

「みちやいけつぷっ」

「おぼろげ」

「うへえ」

様々な人にトラウマを植えつけたようだ。ちなみに最後は俺

「しばらく経てば復活するでしょう。では早速見せて下さい」

「う、うむ」

連れてこられたのは一つの洞窟

入ってみると常に治癒を行う人たちの姿。だが回復するのもつかの間、すぐに黒く染め上がり、肉が壊死していく。

「これ毒じゃね」

「うむ、そうじゃが我らの術者では歯がたたんでな、回復魔法の練習台替わりじゃよ。ホッホッホ」

「ひどいねー、ためしてみますよ」

「自由」

取り出すのはドクロマークの付いた黒いビン

それを見て長老は何か言いたげに眉をひそめたが、何も言わなかった

「さて、ここには種も仕掛けもある魔法の解毒薬、中身がどうなってるのかは私にもわかりません。ですがこれで今まであらゆる毒を必ず直して参りました。では、今回この毒が私のポーションに初めて打ち勝つ毒となるか、私のポーションが今まで通りに勝つか！いざ、尋常に勝負！」

ポトポトポト

患者の上半身を上げ、ドロドロとした液体を口に入れ、すかさず唇を摘む。

吸血鬼の力には逆らえないため、飲まないと思いができない。なので我慢をしても我慢できず飲み込み始める。

ゴクツゴクツゴクツ

「ゼーハーゼーハー」

「ほう」

うーむ、どれどれ、黒いのは広がらないようだね。うん？どうしたんだ周りの連中、目を丸くしてこっちを見てるぞ、特にそのおっさん、口閉じるキメエwww

「はい、次はこのポーションを飲んでねー」

「おめえさん、なんのくすつぷうー!」

普通の赤ポーション(Healing Potion)を与える。

黒い部分はだんだん引いていき、治る。

「く、なんだこれは、体が熱い!」

「うーん、これ死んだ細胞を復活させてんのかそれともなんなのか」

「お主、その薬いくらで売る。」

「うーん、さっきの手下の吸血鬼にお前ら部落のルーン魔法っていうやつか？それを教えてやってくれや。あと衣食住」

「どれぐらい滞在するつもりなんじゃ」

「お前らが出て行って欲しいがるまではいようかね」

「わかったわい、お主、石盤を持って来い。後の者、コヤツから薬をもらえ」

「コヤツじゃなくてノマナな。ノマナ・アンデット」

「ホッホ、そうかいの」

「そうだよ」

第十一話

交渉の評価を考えながら洞窟から出るとディーが地面に座りながら空をぼーっと見てた

「おいディー、どうしたんだ」

「ふえ？ディー？僕？」

あん？なんだ？いや・・・まさか

「お前の名前は？」

「わかんない」

これは記憶喪失・・・さすがに脳みそパーンは記憶が消えるか。うーん、どうするかなー。そうだ、こいつの偉そうな所矯正ゲフンゲフン奴隷根性を刷り込んでやろう

おっと顔がにやけない様にと・・・

「知らないなら教えてやる。お前はディー、私のしもべだ」

「しもべ？しもべやだー！」

あれ、記憶喪失だし騙そうとしたから無理だったか

「言い方が悪かったな、お前は私に仕えてるんだよ」

「仕えてる？」

「そつだ、お前に食べ物を与える代わりにお前が俺の言うことを聞く、そう言う契約だ」

デューはしばらく手を顎の下に置き、眉を潜めていたが

「わかったー」

了承は得れた

「ところで、ジイサン」

ギクツと効果音が出そうなぐらい固まった

いくら弱そうな顔してても魔力の力はそれなりに大きい。他の獣人と比べれば。それがゆっくり遠ざかるうとし、更に数十の”力”が近づいてきてるといふ事は・・・不意打ちかな？

「なんのつもりかなあ」

笑顔で言っただげる

「なんのつもりとはなんじゃ」

クビをかしげるとぼけるジジイを見て更に笑みを深める

「まあ知るわけ無いだろうから教えてやるよ、俺は吸血鬼が得るはずの魔力すべて、一生失う代わりにネクロマンシーという術を得る契約をとある神としてるんだよ」

「ね、ネクロマンシーじゃと？なんじゃ、占いかの。大したことないわい」

「アデアット」

目を細めて指輪にしていた魔法の品を杖に変え、飛んで来た矢をすべて撃ち落とす

「残念ながら、俺のネクロマンシーは占いよりも戦闘特化でね、例えばポーンスパアー」

言いつつ杖を相手の足に向ける

「ぎいぐうつうつう」

障壁と思われる物をあっさり貫通し、相手のスネを貫通し、ふくらはぎが吹き飛ぶ

「このように呪文ひとつでダメージを与えられる。」

「は、ハッターリじゃ！」

「さて、ここが最後のチャンスです、私の条件を飲みますか？」

「ぐぬぬ・・・」

こいつ迷ってるフリしてさり気なく直してやがる

「死体があれば骨の兵も作れるんだよな、今からこの中の奴ら適当

に殺してそいつを骨にすればねずみ算だぜ」

びく、頭の上の耳が動いた

「あーどっしよっかな、ディーこん中の奴ら「待て！分かった！飲むぞい」素直でよろしい」

「じゃあ衣食住はすべて頼むよ、それ以外でもディーの情操教育と魔法の教育も頼むぜ」

「大体はわかるがなぜ情操教育も教えなければいけないのじゃ、それにそちらのメリットはなんじゃ」

「あの糞吸血鬼共を自分の手下にしに行くんだから教育の暇がないんだよ。お前らが子供に教えてる事と同じ事をすればいい」

「なに？」

「薬も提供してやるから吸血鬼狩り手伝ってくれよ」

「む、ううむ、信用が・・・」

「なんかないのかよ、絶対遵守の魔道具かなんか」

「あ、あるにはあるんじゃが・・・」

「いいじゃねーか、お互い納得行く契約と行こうぜ」

「長老」

こちらを睨みつけながら猫っばいやつが石盤を持ってきた

「仕方あるまい」

「お互い詐欺はなしと行こうじゃあないか」

「・・・あたりまえじゃ」

King Crimson

契約内容はこちら

治癒の精を禱る部落はネクロマンサーのノマナ・アンデットに食料、
住居、衣服を提供する

治癒の精を禱る部落はネクロマンサーのノマナ・アンデットに使える
吸血鬼に普通の教育をする

ノマナ・アンデットは治癒の精を禱る部落に協力し、アンデット族
を倒す

ノマナ・アンデットは必要な場合、必ず薬を治癒の精を禱る部落に
提供する

この契約はアンデット族が脅威となくなるまでとする

「まあこんなもんだろ、教育の関係でも速攻で終わらせないからな」

「それもそうじゃろうな」

「じゃ、お互いの血を」

「ワシが治癒の精を誇る部落を代表し、血で」

「俺、ネクロマンサーのノマナ・アンデットの血で」

「この契約に血印を押す」

「これで終わりじゃ」

「おーところでこれ破ったらどうなるんだ？」

「ワシも使うのは初めてじゃがこの呪いは強固での、契約違反をすると治癒の精霊のしかるべき罰が下ると言われておる。確か我らを騙そうとした人間の集団が若くして老い、体が腐り、伝染する疫病にかかったと言われておるぞ」

「おーおっかね。じゃ、これからよろしくな」

「誠に不本意ながらじゃがな」

「まーまーそういうなって」

第十一話（後書き）

投稿前に読みなおして来たけど人が違う人になってる気がして仕方ない。

があるだけだし。

見てみると案の定一人。暗いが、さすがの吸血鬼、ちゃんと見える。

「で、何様かな？」

「あ、悪魔め・・・」

「んー？」

「お前のせいで、お前らのせいで！」

「なにいつてんの君」

「お前ら吸血鬼のせいで私たちのお母さんは！」

「あ・・・なるほど、逆恨みね」

「逆恨みじゃない！」

「あーうるさいうるさい」

「なっむぐう」

ゴーレムに指示を出し、口を塞がせる。仮にも盟友の一族の一人だし、手は出したくない

「おやすみーと言いたいところだが、夜だしね、狩りにでも行ってくるよ」

ニヤニヤ笑いながら言っただけ。案の定若いのか、勘違いしたよ
うだ

「んぐぐうううううう！」

ジタバタしながら何かを言おうとしてる。まあ表情見れば俺が裏切
って仲間を狩りに行くように見えるんだろ。バカが

ビクッ

おっと、殺気が出たかな？ちょっと勘違い野郎にむかついちゃった
けど失敗失敗

「んじゃ、行ってきまーす」

片手を振りながら外に出る。

そして打たれる矢を

「ボーン・アーマー、てね」

何も無い所から骨の鎧が生み出され、矢があたり、碎け散る。

「あー、まだ柔いなあ」

「貴様！弟をどうした！」

「あーん？お前らだけでやってるのかー？」

「当たり前だ！みんな不拔げやがって・・・」

「へー、お前の弟は中だよ。早く行かないと死ぬかもね」

めんどくさいから騙しとこ。一応契約したその晩にいきなり殺した
ら信用が・・・ね

「な、エディいいいいー！」

さ、今のうちかな

大きなコウモリに変身し、今日来た道と思われる方向から一直線に
飛ぶ

「あるといいねー」

後ろで怒声が聞こえた気がするけど、大丈夫でしょ。ディーも出来
る子のはずだしね

しばらく飛ぶと、大きな力があつた。

「ここかなー」

木に近づき、コウモリを解除し、自然落下に任せる。

「つう」

足が折れたが、すぐに治る。

ゴクツゴクツ

念のために赤ポーションを飲み

「騙狼」

腕を狼に変える

変えたのは右手だが、左手あれば十分かな。むしろ右寄り大雑把になりがちだし、杖を振り回すのにちょうどいいかもしれない

「さあさあ、開幕でいざんすよ」

第十二話（後書き）

手抜いた様に見える？実はそのとお．．．なわけないよ、うん。ほ
んどだよ？ホントだからね？

笑えそうぞ笑えない、そんな感じだった。

「え、これで終わり？つまんな」

なんでこれぐらいで苦戦してんだろ、アイツら。

まあいいよね

「適当に潰しても」

「困るんだよね」

「はあ？」

後ろからこちらのセリフをつなげる様に答えてきた奴を睨む、案の定いるのは人型

残念ながらワープしてくる直前に感知してましたがボーンスパイア撃つの遅れちゃった、テヘッ

とか現実逃避してみたけど普通に戦って勝てんじゃね？と思い直す

「やあやあ、こんにちわ。僕はナイトの一人、ジャンブレだよ。今日はどういったご用件で？」

「偵察件ボーンスパイアさ」

「おっと」

かるくクビをかしげ、避けられた。チツ、正直今まで戦闘経験大してないから全部不意打ちと身体能力で潰してきたのに怖いな。どうしよ

「おお、こわいこわい。君のところの偵察って言うのはこうやって敵の事を襲う事を言うのかい？それだとしたら今度から夜襲とか言う言葉にするのがいいと思うんだけど、どうだい？」

「あー、それもそうだな、偵察だしもつと軍の数とか探さないと行けないのか。めんどいなー」

「まあまあ、ここはおとなしく帰るか、僕に殺されるか選んだらどうだい？」

「それは周りのみんなが手を出さない前提かい？」

わかった、道理でこいつ口やかましいと思った。手下呼んで・・・デカイの4つきてるな。

「それはどうかな？」

「」「闇よ」「」

「アイアン・メイデン（ボソツ）」

手探りでWC3の無敵ポーションに手を当てる。取り出すかまよったが、死なないと判断したためだ。

俺は無敵ポーションさえ飲めば全部食らわない安心感から動かなかったことが幸いした。相手は以前自分の下半身を持っていった技を

自分の周りに撃ち、わざとらしく上に穴が開けてる。飛び退くことを予測した攻撃だと思いが、動かなかったためすべて空振りといっている。

細かいところを言うと、腕の肉をこっそり持ってかれて骨がはみ出たが、すぐに回復した。血の力がこっそり減った気がした。よく見ると例の毒っぽい現象が起きそうになったようだが、自然治癒でどうにかなったようだ。

無敵ポーションを戻し、最もデカイ赤いポーションを持ち出し飲む。

「ぷはー、いきなりはひどいぐっ」

飲み終えて戯言ほざこうとしたら喉を切られた。もちろん速攻で回復し、切ったせいで伸びきった腕をつかむ。相手の顔は驚愕で歪んでいる。それはそうだ、普通なら致命傷と思えるぐらいバツクリ切れてんだ。だけど俺は吸血鬼、脳か心臓でしか普通の武器ではそうそう死なないさ。

と言うより銀じゃなくて助かったのかな？

バキヤ

「ぐおおおおおおおー！」

直感に任せ、頭を下げる。

「チツ」

バクン

そんなイメージで後ろにいきなり風が起きた。まるでいきなり真空状態にされたのごとく・・・真空状態？！

目を見開き後ろを見ると舌打ちをしたと思われる奴が飛び退いた。

「闇よ」

後ろに飛び退く

ドン

黒く大きな玉が落ちてきた

「闇よ」

飛び退いた先にいきなり地面が真っ黒になった。

バグン

霧に一瞬で変わり、地面がえぐれた後に着地する

「闇よ」

そこに上からたくさんの黒い杭のような物が落ちてくる

「ボーンアーマー」

一瞬で割れるのを動体視力が捉えており、体をずらし、心臓と脳が当たらないようにする。

「チツ」

腕が落ちた。足が釘つけされた。逃げれない

目の前に居た一人の口が笑ったように見えた

むかついた

「あであつと」

「「「闇よ」「」」

ぶちブチブチ

ズガガガアアアアアン

ぎりぎり足を切り落とし、飛び退く。

速攻で無敵ポーションを飲み、赤ポーションの最大のものを2つ飲み、コウモリに変身して逃げた。

黒い円が目の前出て、その中から剣を持った男が怒りを頭にした顔で現れた。

斬り下ろし 体を傾け、耳が落ちる。そして心臓近くまで切られ、手で刃をつかむ。そして心臓を切れず、止まった。

ニヤア

「ライフタツプ」

「う、あ
」

顔に押し込む。柔らかい目を狙ったけど、頬骨にあたって口に入
た。関係ない、もつとえぐる。えぐる。えぐり

ぐちゃぐちよぐつちや

ああ、回復していくのがわかるよ。ああ、血がもったいないね。あ
あ、君はとても美味しそうだ

「ぐ、あ・・・」

ゴクツゴクツゴクツ

バキバキバキバキ

バン！

いったあ、あー空中だということ忘れてた。あーあ、もったいない、
潰れちゃったじゃないか。あんなに美味しかったのに。

だけど探知範囲内には入ってる、食えるかなあ・・・

チラッ

「あみよ
」

ちえ、逃げんなよ

あーあ、もったいない。舐めよ。

十三話（後書き）

適当に飛ばしまくって手抜きたい
現在進行形で手抜いてるとか言わないで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1818r/>

快適なネクロマンサー生活

2011年12月25日23時52分発行